



Ultimate female warriors
don't beg for her life....

一章

Chapter 1

カレリア王国第十五王子イェルケルは、よわ齡十七にして生まれて初めて、生死の際にまで追いつめられていた。

場所は査察に訪れた辺境地区の城。昼食に招かれた大きな部屋で、出てきたのは食事ではなく金よつ属鎧に身を包んだ完全武装の兵士三十人。

食事に来たイェルケルは当然鎧なぞ身につけてはおらず、王国騎士の正式な衣装でもある上下黒で金の刺繡が入った軍服と、騎士の嗜みとしての剣を差しているのみ。

イェルケルはかなり鍛え込んだ体つきをしているが、長身のせいか細身に見られがちだ。また、その優しげな風貌も線が細く見られる一因でもあるろう。

そんな若造が武器を持ったとて、殺気に満ちた兵士達が怖おじる道理はない。

遙々辺境まで来た旅の疲れをねがろうと言われ昼食に招かれ、配下の騎士五人と共に席に着くなり三十人の兵士が雪崩れ込んで来た。

イェルケルは咄嗟に剣を抜き、内の一人の剣を払い落とした。

狼藉者を怒鳴りつけようとしたところで次なる兵が挑んできたので、そちらも殺さず剣を弾き飛ばしてやる。

しかし三人目は背後から来たため、イエルケルも狙いを定めている余裕がなく、勢いよく剣を薙いだらその兵士の頭部を直撃し、彼はその場に倒れ伏した。

恐らく即死であろう。

しまった、という顔で周囲を見渡すイエルケルは、そこでようやく、自身がこの昼食会を開いた城主にハメられたことと、敵が本気の殺意を持って襲い掛かってきていると知ったのだ。

供の五人の騎士は全員斬り伏せられ、周囲にはイエルケルが仲間を殺したことで殺気だった兵士達が、抜き身の剣を手にこちらを睨み付けている。

兵士達の後ろの安全域で、サルナール辺境領領主は驚いた顔でこちらを見ていた。

「これは予想外ですな。まさかここまで段取りしておきながらこちらに損害を出そうとは。いやはや、騎士学校主席卒業は伊達ではないということですかな」

服を着たヒキガエルのようなでっぷりとした領主は、嫌らしい顔で笑い出す。

「てっきり王族のご威光にて得た名誉だとばかり思っておりましたよ」

イエルケルは内心で、十五人目の王子なぞに威光も何もあるものか、と罵るが、口に出したのは別の言葉だ。

「事情の説明云々ではなく、まずお主にこの判断を下した理由を聞きたいところだ。王の使者として訪れた私に手を出す意味が、わかっているのだろうな」

精一杯の虚勢を張り、胸をそびやかしながら言うイエルケル。騎士学校を出てまだ三ヶ月であるからして、実戦の経験なんて絶無で、こうして人を斬ったのも生まれて初めてなのだ。

更に言うならば、ヒキガエルのようであつても相手は一領を預かる領主様で、そのような地位の人間とこうして差し向かいでやりあつた経験もない。剣を向けられていることではなく、そちらの方にこそイエルケルは緊張し、膝が震える。

ヒキガエルはというと、王子とはいえイエルケルのような若輩者を相手に緊張するなどということはない。

「ははは、わざわざご教示いただき恐悅至極。ですが、そのようなお言葉で貴方の命は助けてやれませぬなあ」

イエルケルは他人に悪意を向けられることには慣れていない。悪意に殺意を伴うのはこれが初めてだが、イエルケルは周囲を見渡し、殺意とやらはこの程度かと小さく笑う。

「なあ、一つご領主殿に聞きたい」

「ふむ？ 問いですか？ 命乞いではなく？」

「ああそうだ。私はここから、何人殺せると思う？」

「は？」

両肩をぐるりと回し、首を左右に曲げて簡単な準備運動とする。

「私は十人ぐらいは殺せると思うんだがね。まあいいさ、事ここに至っては口で何かを言うことに意味なんかない。そしてキサマは、絶対に殺す。いいか、私を殺すのはいい。ハメられた私が愚かだったということだろう。だが、キサマだけは絶対に許さん。私の目の届く範囲に来たこと、後悔させてやる」

そう言うってイエルクエルはテーブルに飛び乗り、その先に居る兵士達、もつと言えば更に奥に居る領主へと斬り掛かっていった。

ふと、イエルクエルは思い出す。一緒に連れて来た従者達はどうしたろうかと。

彼等はあくまで従者であるし、命を取る程でもない。とイエルクエルならば考えるのだが、このヒキガエルにそんな寛大な処遇を求めるのは無理があらう。

中にはまだ年若い女性もいる。彼女等を思うと、イエルクエルの胸は少し痛んだ。

穏やかな春の日差しは外を歩くにうってつけのもので、一張羅である黒の軍服に身を包んだイエルクエルは、散歩でもする気分でカレリア王国王都の街路を歩き目的地に辿り着いた。

その場所、カレリア王国内でも一、二を争う豪華で華美な建物、国軍元帥府を前にすると、イエルクエルは王子という身分でありながらも気後れしてしまう。

それは騎士学校に通いながらも軍の兵としての教育を受けたせいだろう。

ここはカレリア王国の軍事の中心と言っている場所、建物の入り口付近は常駐している衛兵の他にも常に誰かしらの姿が見られる賑やかな場所だ。

元帥府の中にはたくさん部屋のあり、イエルクエルはその内の一つである大鷲騎士団の部屋を訪ねる。

部屋に入る前に一度自分の格好を見下ろし、失礼がないか確認する。

黒を基調に要所に金色のラインが入った長袖長ズボンの軍服は、騎士の証だ。

左胸には王族を示す紋様をあしらってあり、襟元にもより小さい同じものが描かれている。

騎士学校で学んだ礼法に則りノックをし、室内より返答をもらってから扉を開ける。

イエルクエルが室内に入ると、中にある三つの机の内、最も大きく豪華な机に座っていた中年の男、大鷲騎士団副団長が喜色も顕わに席から立ち上がる。

「おお、お待ちしておりましたぞイエルクエル殿下」

そう言うって副団長は奥の応接室へイエルクエルを通す。

応接室は元帥府全体を覆う勇壮な華美さを更に煮詰めたような部屋だ。壁に掛けてある旗といい盾といい剣といい、どれもこれも一目で高価だとわかるものばかり。

机を中心に正対するように椅子が二つ。勧められるままに席に着くと、早速副団長は本題に入った。

「お呼びしたのは他でもありません、騎士学校を卒業なされて既に三月、殿下にもそろそろ正式に騎士として軍務についていただくこうと考えております」

イエルクエルは驚きをつい顔に出してしまう。それを見てとったのか、副団長は補足を加える。

「失礼ながら殿下の現状は把握しております。殿下の持つご領地のみでは生活も立ち行かぬでしょう。ですので元帥が特にとの仰せで、本来は騎士見習いとして最低半年過ごしていただくところなのですが、殿下にはすぐに働いていただくこうと。無論騎士として、また王子として相応しい仕事を留意させていただきますぞ」

副団長の言う通り、イエルケルの持つ、農家の屋根の上に立てば簡単に全域が見渡せるほど狭い領地では、イエルケル一人ならともかく、使用人達に給金を払うと利益も出ないどころか赤字になる。

カレリア王国には王族が多数おり、如何な王族とは言えども、よほど重要な任に就いている者でもなく皆捨扶持に近い金しか与えられていないのだ。

騎士見習いの給金ではなく、騎士としてのそれを国軍からもらえるといたのであれば、確かにありがたいことこの上ない。

「過分なご配慮感謝いたします。して、仕事とは一体」

「おお、お受け下さるか。何、そう難しいことではありません。殿下には五人の騎士を率いて辺境領への視察をお願いしたいのです」

なりたて騎士のイエルケルに騎士の部下までつく仕事とは確かに破格の話である。逆に上手い話すぎてイエルケルは確認せずにはおれなかった。

「ありがたいお話ですが、ご存知のように、私のような第十五王子にはこのような厚遇にお返しする術がないのですが」

副団長は大きく首を横に振る。

「いえいえ、何をおっしゃいますか。他の数多居る王子達ならいざ知らず、イエルケル殿下は王族の身でありながら騎士学校に入学し、他の貴族達と共に切磋琢磨を重ね主席卒業の榮譽を勝ち取った、王族の鑑とも言うべきお方ではありませんか。元帥も殿下の将来には期待しておられました、

この仕事も是非殿下にとのお話なのですぞ」

意外な副団長の言葉にイエルケルは目を丸くする。

卒業前の剣術試験の時、トーナメント形式で組まれた試合において、一回戦でかの元帥が可愛がっている孫を倒してしまったイエルケルである。

恨まれてるのでは、と疑っていたぐらいなのに、逆に目をかけてくれているという。

自分の器の小ささが嫌になると同時に、ロクに味方もいない中必死に頑張った騎士学校時代を元帥程の方が評価してくれているということが、涙が出る程に嬉しかった。

「わかりました。非才の身ではありますが、全力を尽くしましょう」

元帥府の中で五人の騎士を紹介されたイエルケルは、更に二人、騎士見習いを連れていくよう頼まれた。

自分も直前まで見習いだった身だ、任務を与えられる喜びは我が事のようにわかる。

「もちろん構わない。面通しはすぐ出来るのか？」

元帥府内での案内人である騎士は、少し待つようイエルケルに言う。待合室で時間を潰すこと半刻。先ほどの騎士が一人の騎士見習いを連れてきた。

イエルケルは驚きを隠し切ることが出来なかった。紹介されたのは、世にも珍しい女の騎士見習いであったのだ。

「アイリ・フォルシウスと申します！ どうぞよろしくお願ひします！」



いや、それ以上に。彼女の容姿が特徴的にすぎた。

美々しく輝く金色の髪を二筋の三つ編みにして後ろに流した、その目立つ黄金の髪すら霞む程の輝ける美貌の主であるのだ。

未だ成人に至らぬ、そんな年、顔つきであるため、美しいというよりは愛らしいと称される方がより適切であろうが、いずれにせよ目を引かずにはいられぬもの。

イエルケルも彼女、アイリの美しさ、愛らしさにじっとこれを見つめてしまい、はたと気付いて僅かに目線を上へと逸らす。

上へ逸らしたのには理由があつて、彼女の身長は低すぎてイエルケルの肩までもなく、そんな彼女の顔から更に下となると不自然に見下ろす形になってしまうのだ。

イエルケルは誤魔化すように一度案内してきた騎士を見た後、改めてアイリを見る。

女性らしさより騎士見習いとしてのあり方の方を重視しているのか、衣服は極めて簡素で飾り気のないもので、しかし、肩まで伸ばした金の髪と輝くような美しい容貌が、簡素が故に引き立って見える。

腰に差した剣も、特に長い物でもないのだが、先端が地面を引きずりそうさだ。

彼女を連れてきた騎士が何処となく申し訳なさげなのは、仮にも王子の身分にあるイエルケルにこのような少女を騎士として紹介しなければならぬせいだろう。

騎士につられて自分も彼女に失礼な態度を取ってしまったそうになったイエルケルは、咳払い一つで心を立て直し少女に向き直る。

「イエルケルだ。私もつい先程まで同じ見習いだったんだ。お互い慣れないことも多いだろうが、一緒に頑張っていこう」

はいっ、と笑顔と共に元気の良い返事がかえってきた。この笑顔だけで、彼女に失礼な態度を取らないで良かったと思える晴れやかな笑みだ。

イエルケルは目線で付き添いの騎士に、もう一人は、と問う。騎士が言いにくそうにしていると、少女、アイリが代わりに答えてくれた。

「申し訳ありません、もう一人はちょうど席を外しております。後日挨拶に向かわせますので……」

手を小さく振るイエルケル。

「ああ、構わないよ。任務の時に顔は合わせるしね。知り合いかい？」

「ええ、彼女とは妙に縁があります。お互い立場も似ておりますし」

ここで、イエルケルは怪訝そうな顔をせずにするのに相当な努力を要した。

立場も似ている、彼女。つまり、もう一人の騎士見習いも女だということか。とはいえそれを彼女に確認するのも、女であることを気にしていると取られかねない。

案内してきた騎士は、更に恐縮した表情。アイリは、自身が女で騎士であるということに、少なくとも表面上は違和感を持っていないよう振る舞っている。

イエルケルは彼女の面目のため、この場でこのことを口にするのを控える。

「では、当日はよろしく頼むよ」

当たり障りのない会話で彼女との初邂逅を終える。

軽く会釈してアイリと騎士はこの場を後にした。二人が居なくなつてすぐ、イエルケルは我が身に起きていた異常に気付いた。

自分でも気付かぬうちに、何故か左手を剣の鞘に添えていたのだ。それと意識すると、更に右手は腰の辺りですぐにでも抜けるような位置から全く動いていなかったことにも気付けた。

以前に似た経験を一度だけしたことがある。騎士学校にて初めてカレリア最強騎士と言われるダレンス教官に会った時、同じように体が勝手に警戒してしまっていた。

何とも薄気味悪い感じに首を傾げるイエルケルは、複数の足音が自分に向け近づいて来るのを感じそちらに目を向ける。

「おっとこれはこれは、あまりに王子の数が多すぎて誰も覚えていない者が居ない、十五人目の王子様であるところのイエルケルじゃあないか」

言葉のイントネーションがもう不愉快である。騎士学校時代、何度も聞いた声だ。

近づいて来るのは男の五人組。先頭に立つ若い男は、カレリア王国の軍事における最高責任者である元帥の孫の、押しも押されぬ大貴族、ヘルゲであった。実権を持たぬとはいえ王子という身分を相手に平然と名前を呼び捨てる、そんな傲岸不遜な男である。

付き従う四人の男達もいずれも正式な騎士であり、相応の身分と財力を備えた有力者だ。

不愉快さを隠そうともせぬままイエルケルはじろりとヘルゲを睨むも、思い直して一度目をつぶり、苛立ちを堪える。

「……ヘルゲか、ちようど良かった。お前に言っておきたいことがあってな」

権勢においては飛ぶ鳥を落とす勢いの有力若手貴族ヘルゲを相手に、自分が王子で相手が騎士学校の同期だからと一切敬語を使わないイエルケルも、彼から見れば傲岸不遜、と思われているのかもしれないが。

「あん？」

「元帥のおかげでたった今俺も騎士になれたところだな。元帥にはイエルケルが感謝していた、と伝えてもらえないか」

挑発に乗らぬイエルケルに、ヘルゲは鼻白んだ様子だ。

「何だよ、今日はヤケに殊勝じゃねえか」

「元帥のおかげで王子らしい任務に就くことが出来たし、早々に騎士位も得られたんだ。俺だって感謝ぐらいはする」

ヘルゲはじっとイエルケルを見つめた後、興味を失ったかのような顔で踵を返してしまふ。

「やーめた、今日はお前つまんねーし。おじいさまには言っといてやるよ」

そのまま立ち去ろうとするヘルゲに、イエルケルは不思議そうな顔で問いかける。

「おい、ヘルゲ」

「なんだよ」

「お前、変なものでも食べたのか？ 何時もならもっと頭悪そうに絡んでくるところだろ。騎士になるのは百年早いだの任務なんざ出来るわけないだの……あー、思い出したらなんか腹立ってきた」

「うっせえ！ 今日はそのままだけでいいよ！ ほっとけ馬鹿！」

ヘルゲはそのまま立ち去っていくが、聞こえない場所でもう一度呟いた。

「……馬鹿、めが」

「たかが一人を相手に何をやっている！」

領主のそんな怒声が聞こえるも、イエルケルにそちらを見やる余裕はない。

訓練とは全く違う。

見ず知らずの相手に不可逆の損傷を与えるという行為が、これほどの重圧になるとは想像もしていなかった。

これまでに刃を落とした剣で相手に怪我を負わせたこともあった。だが、打つのと斬るのとはとんでもない違いがある。しかも、斬った相手は間違いない死に二度と起き上がることはないのだ。これまでは絶対にそうならぬよう注意して剣を振ってきた。それがロクに心の準備も整わぬ内にいきなり本番に放り込まれて、混乱するなという方が無理があるろう。

先ほどは随分と威勢の良いことを言ってみたイエルケルだが、今はもう必死に剣を振るうのみである。

周りも見えなくなっており、今こうして集団に囲まれながら凌いでいるのは、ひとえに鍛えぬいた高い身体能力の賜物である。

領主は領主で、こんなにもイエルケルがしぶといとは思ってもみなかつたようで。また先にイエルケルが放った唼阿たんかが効いているため、焦あせった様子で早く殺せと兵士達を怒鳴り散らしている。

そんな騒然とした室内に、信じられない程の爆音とじろが轟とどろいた。あまりの音に、室内に居た全員の動きが止まる。

何が起こったのかイエルケルにはわからなかつたが、とりあえず目の前で起きた現象は、板のようなものうなものが飛んで来て兵士を二人薙ぎ倒した、ということらしい。

領主を含む兵士達全員がそちらに目を向けたのを確認すると、イエルケルもちらと轟音ごうおんの元へと目をやる。

「はっ！ はっはっはっは！ 見ろステイナ！ 殿下はご無事だ！ お前の言った通りであつたわ！」

修羅場しゆらばに似つかわしくないキーの高い声は、女性のものだ。

部屋へやの入り口からそんな声と共に姿を現したのは、少女にしか見えぬ騎士見習い、アイリ・フォルシウスであつた。

こんな殺伐とした場においても彼女の輝ける愛らしさはその存在感を失わず、彼女を見たイエルケルも思わず頬ほおを緩ゆるめてしまう程。

彼女は従者として別室にて待機していたのだが、どうやら無事だつたようでイエルケルは胸を撫なで下ろす。

そのアイリの後ろからもう一人、女性が室内に入つて来た。

「ね、言ったでしょ？ って……ひーふーみー、へえ、五人斬つたんだ。驚いた、殿下つてば思つてた以上にやるみたいね」

今度は最初の娘よりキーが低めであるが、やはり女性らしい甘さを帯びた声である。

その女性はイエルケルの従者のもう一人。アイリに続く二人目の女性騎士見習い、ステイナ・アルムグレーンであつた。

イエルケルは彼女を初めて見た時、その極めて女性的な胸部に目をやらぬようにするのに、相当な労力を払つたもので。

厚手の衣服で隠してなお、内側より溢あふれる胸の自己主張を抑えることは出来ず。健全な男子が横を通り過ぎれば二度見不可避であろう大きな大きな胸の持ち主である。

またその美麗な容貌は、細めた切れ長の目と背中に伸びる銀髪のせいでキツイ印象を与えるが、顔の端々に少女の幼さを残しているため、キツさの中にも何処か愛嬌あいきょうが感じられる。

ステイナは敵兵士達を冷ややかな目で見ているが、そんな表情にすら魅力を感じられるのは、そういう顔つきと表情の不揃ふぞろいさ故であろう。

もちろんこれらは全て、彼女の精緻に整つた容貌があつての話ではあるが。

最初に声を出した小柄な女アイリは、兵士達の方になぞ目も向けず、剣を手にしたまままっすぐにイエルケルの元へ向かう。

彼女もイエルケル同様、鎧よろいなぞ着ておらず外套がいとうを羽織はつた旅装束そのままである。

一方、同じ旅装束ながら厚手の衣服でも隠しきれぬ豊満な肢体したたいを持つステイナは、比較的部屋へやの

入り口の近くに居た兵士の一人に無造作に近寄る。

ステイナは抜き身で持っていた剣を、ゆっくりとした速度で兵士に向けて振った。虫が止まりそうな速度の剣に対し、兵士も戸惑いながら受ける形に剣をかざす。

当然受けは間に合い剣と剣がかみ合う、はずであったのだが、兵士は驚きに目を見張る。剣で受けたはずなのに、ゆったりとしたステイナの剣は止まってくれないのだ。

兵士は驚き慌て、剣を動かそうとするがまるで動かない。その間にもステイナの剣はじわりじわりと兵士の体に向かって進んでいく。

ようやく兵士の剣が動くようになったのは、ステイナの剣が兵士の剣を半ばから両断してからであった。

そのままステイナの剣はゆっくりと兵士の体内に食い込んでいき、反対側に抜けていく。

肩の下から入り、逆側の胴へと抜けていく剣の軌道上には、鉄の鎧があったというのに僅かも剣速は落ちぬまま。

剣が通過した後も、兵士の体はそのまま。

あまりの不可思議さに、残る兵士達も領主も一言もないまま。

振り切った剣で、ステイナはこつんと兵士の額を叩いてやる。そこでようやく兵士の体は斬られたことに気付いたのか、上体のみが後方へと剝がれ落ちていき、残る部位もその場に崩れ落ちた。

ステイナは一人を斬った後とは思えぬ陽気な声を出す。

「見たアイリ？ 鎧着た兵士相手でもやれば出来るもんねコレ」

王子の前に立つアイリは、呆れたように言った。

「遊んでおる場合か馬鹿者。さっさと片付けて脱出せねばならんのだぞ」

「はいはい。じゃあ……」

血糊ちのり一つついていない光沢を放つ剣を構え、ステイナは兵士達を睨む。

「殺しますか」

遅ればせながら、イエルケルは先ほど兵士二人を跳ね飛ばしたのはこの部屋の扉であると気付いた。

一体どんなことをすれば、あんな投石器みたいな速度で扉が飛んでいくのかはまるでわからなかったが。

アイリが剣を振るう。ただそれだけで、兵士の一人が受けた盾ごと千切り斬られた。

その兵士は決してまともな体では出来ぬ姿勢で我が身の惨状を見下ろしながら、きよんとした顔のまま事切れた。

ほぼ同時に逆側より襲い掛かってきた兵士の剣撃は、アイリの左手が剣の平を引っぱたいて軌道を逸らし、返す裏拳が兵士の胸板むねいとうに打ち付けられる。

身長差からそこには届かぬのであるが、胸甲を胴半ばまでへこましながら兵士は大きく後ろに殴り飛ばされる。

イエルケルは、こうまで圧倒的な戦闘力を見たことがない。速さも力も、そもそも人間としての能力が違いすぎる。

アイリが王子の守りに回れば、ステイナは攻めに回る。

ステイナの動きは速すぎる。特に腕から先、剣先に至っては距離がありながら挙動が見えない。ステイナの剣先は、吸い寄せられるように兵士達の急所へと伸びていき、鎧の隙間をすり抜けるように、或いはこじあけるようにして突き刺さる。

イエルケルもまた剣を学ぶが故にわかる、惚れ惚れするような剣技だ。

アイリが三人、ステイナが五人程斬ると、二人の動きががらりと変わった。

ステイナの剣から洗練された動きが失われ、荒々しい剛剣へと切り替わる。

当たれば当たった部位が千切れる。ならば細かな狙いなど必要なく、鎧越しであろうと剣越しであろうと、剣を叩き付け砕くのみだ。

アイリの方は逆に膂力に任せた戦い方を控え、目にも留まらぬ足捌きから生じる俊敏な荷重移動により、驚く程素早く強い剣撃を打ち放ってくる。

その狙いは精妙無比。一撃目で鎧を弾き飛ばすと二撃目で確実に急所を貫く。これではどんな重装甲も意味がない。

イエルケルは二人がわざわざ戦い方を変える理由を見抜いた。

二人は実戦で戦い方を試しているのだ。まるで初めて買ってもらった剣の切れ味を試すかの如く浮かれながら。

イエルケルは部屋の中の敵を二人に任せると、自分は部屋の入り口側に動く。アイリが驚いた顔をしていたが、イエルケルが自分は大丈夫だと言ってやると彼女も嬉々として攻め手に回る。

部屋の入り口で待ち構えていると、兵士達が数人部屋に駆け込んでくる。これを次々入り口にて屠る。

最初に居た三十人の兵士と比べれば装備も薄く技も拙く、イエルケルの技量ならば一人一刀で充分だ。

「報告に来た伝令か」

扉を閉め切つて鍵でも掛けておきたいところだが、扉は、恐らくはアイリが殴ったか蹴ったかしたせいで、外れてしまったままだ。

一気に十人以上に押し切りにこられたら入り口を抑えるのは無理だろう、とイエルケルはより早く撤収出来るよう兵士退治に参加しようとする。

残る敵兵士は二人。そしてまるで別の生き物になったように青ざめている領主。アイリが剣についた血を払いながら問う。

「どうされます殿下？」

「領主は私が。彼もカレリア貴族だ。せめても王族の手で葬ってやろう」

呆れ顔のステイナ。

「随分とお優しいことで」

これに対し、いたずらっぽく微笑むイエルケル。

「恨みを晴らそうというつもりも、少しはあるのだがね」

そこから中から血臭漂う修羅場の最中での王子の冗談に、ステイナは目を丸くした後、口を開いて笑い出す。

「あ、あつははは。正直ですわね殿下」

ステイナはアイリと視線を交わすと、二人は同時に動きそれぞれ一撃で兵士を一人ずつ斬り倒す。領主は這い蹲るよう^{はくま}にして命乞いをしていたが、イエルケルは生まれて初めて命を狙われ死をも覚悟した直後であり、どうあっても彼を許す気にはなれなかった。

半笑いの顔で、まさか本当に殺す気ではあるまい、と呟いた領主の首を、イエルケルは一刀で斬り飛ばした。

床を転がる領主の首、これが倒れていた一人の敵兵士にぶつかると、彼はそのことで意識が戻ったようだ。

苦痛を堪えながら立ち上がる兵士は、周囲に自分しか生きている者が居ないことと、首のみになった主を見て、絶望的な現状を把握する。

口惜しげに、イエルケル、アイリ、ステイナの三人を睨み付け、兵士は言った。

「くっ、殺せ！」

この言葉に、アイリは満面の笑みで応えた。

「良karou！」

「え？」

問い返すイエルケルとステイナの声を他所^{よそこ}に、アイリは言葉通り、一刀でその兵士の首を跳ね飛ばした。

「見事！ それでこそカレリアの兵よ！ 主への忠義、まっこと天晴れ^{あっぱ}であった！」

もう逆らうことも出来ないだろうし、別に殺さなくても、とか思っていたイエルケルとステイナは、多少の思考停止と共に順に言葉を発した。

「いやあ、あの娘容赦ないなあ」

「すみません、ああいう娘なんです」

「ありがとう、おかげで死なずに済んだ。本当はもう少し色々話したいこともあるのだが、今はともかくこの城を脱出しよう」

イエルケルの言葉に、はい、と元気良く返事をしたアイリは入り口から外を窺う^{うかが}。

「殿下、既に兵が取り囲んでおります。突入を渋っているのは……領主の安否がかかっているからでしょう」

ステイナは部屋の窓際に向かう。

「ん、厩舎^{きゅうしや}はあそこで……城門は開いている。よし、殿下、脱出路が決まりました」

ステイナが招くままに窓際に向かうイエルケル。

「そうか、しかしここは確か三階だったし、窓からの脱出は無理が……」

「大丈夫ですよ。殿下も鍛えてらっしゃるみたいですし、最悪足でも折ったら二人で抱えて行って

あげますから」

「え？ いや、だから三階から飛び降りたら普通に死ぬのでは……」

特に城の三階は他の建物のそれよりずっと高く出来ているもので。

アイリも窓際に駆けてくる。

「急ぐぞステイナ、外の連中も痺れを切らしてきた。殿下、行きますぞ」

ステイナとアイリが同時に両開きの窓を開き、身を乗り出す。まずは大丈夫であることを示すつもりか、アイリは僅かな躊躇も見せず平然と窓より飛び降りる。

「おいつ！」

思わず声が出るイエルケル。上から見る高さは、下から見上げるそれより遙かに恐ろしく思える。下に居る人の大きさなど、ここから見ると手の平程もない。

アイリは着地と同時に地面を転がり、一回転で綺麗に立ち上がる。そこに困難を乗り越えた達成感も苦痛を堪える表情もなく、すぐに続くよう促しながら手を振っているのみだ。

イエルケルは窓に足を掛け窓枠に掴まっているステイナと顔を見合わせる。

ステイナがにっこりと微笑んだことで、イエルケルは覚悟を決めた。

アイリがそうしたように着地と同時に転がろう、そう決めて飛んだのだが、予想外に長い浮遊感に一瞬自らの位置を見失ってしまう。

せめても足から着地したが、その後崩れるように後ろに倒れ、背中を強かに打ちつけてしまう。

慌ててアイリが助け起こすと、ステイナが飛び降りて来るのが見えた。

ステイナは窓枠の下端を掴んだまま飛び降り、窓枠にぶら下がって両腕のみで一度全体重を支えた後に手を離し、次は壁面のでっぱり部に片足を乗せて減速し、くるりと横に回って今度は逆の足で別ののでっぱり部に足を乗せ更に減速。

着地は綺麗に音もなく、であった。

アイリがイエルケルを助け起こし、ステイナが聞く。

「大丈夫ですか？」

「ぜんっぜん平気だ」

女の子の前にした男には見栄というものがあるのである。

それでも痛い思いをしただけはあったようで、三階から飛び降りるのは兵士達にとっても予想外だったらしく、飛び降りた中庭には僅かな兵士しかいない。

三人は厩舎に向かって一気に駆け抜け、馬を奪うと開いていた正門からさっさと出て行ってしまったのであった。

辺境では一般的な農家で、四部屋を有する平屋建ての建物。この家の持ち主一家四人は、現在部屋屋の隅で固まって震えていた。

彼等の前で見張り役として椅子に腰掛けるイエルケルは、ひどく怯えた彼等の表情を見ると心底から情けない気分させられてしまう。

「……他に手はなかったものか」

イエルケルの眩きが聞こえたのか、隣の厨房から返事がきた。

申し訳なさそうにアイリが。

「わ、私も同意見なのですが……その、ステイナが……」

同じく厨房に居るステイナはまるで悪びれていない。

「本来、逃走中という私達の立場を考えれば当然殺しておくべきなのです。それを殿下が露骨に嫌そうな顔をするから、仕方なく生かしておいてやってるのですよ」

部屋の隅の四人は、もうどうにもしようがないぐらい怯え震えてしまっている。

あまりに惨いので、この話題を引つ張るのは止めることにしたイエルケル。

しかしこのままではまるで盗賊だ、と何か手はないものかと考えを巡らせ、そして妙案を思いついた。

「そうだ、これだ。これを受け取ってくれ」

イエルケルは懐より銀貨を一枚取り出し、彼等に渡す。

「滞在費だと思ってくれ。我等は断じて盗賊などではないのだから、受け取ったものに対する正当な対価は払うぞ」

即座に厨房からステイナの声が。

「何をしようと拒否を許さない段階で盗賊以外の何者でもないと思うのですが」

「わっ、私は王族であり騎士でもあるのだぞ！　そ、それがこのような不名誉な真似を……それもよりにもよってカレリアの領民に対してだな」

やはり即座に厨房から返事が。今度はアイリである。

「殿下。こーいう時のステイナは概ね正しい上に、口論するともものすこく悲しい気分にはせられませので、その……」

色々と言いたいことはあるが、確かに今は緊急時ということも理解しているので自重するイエルケル。

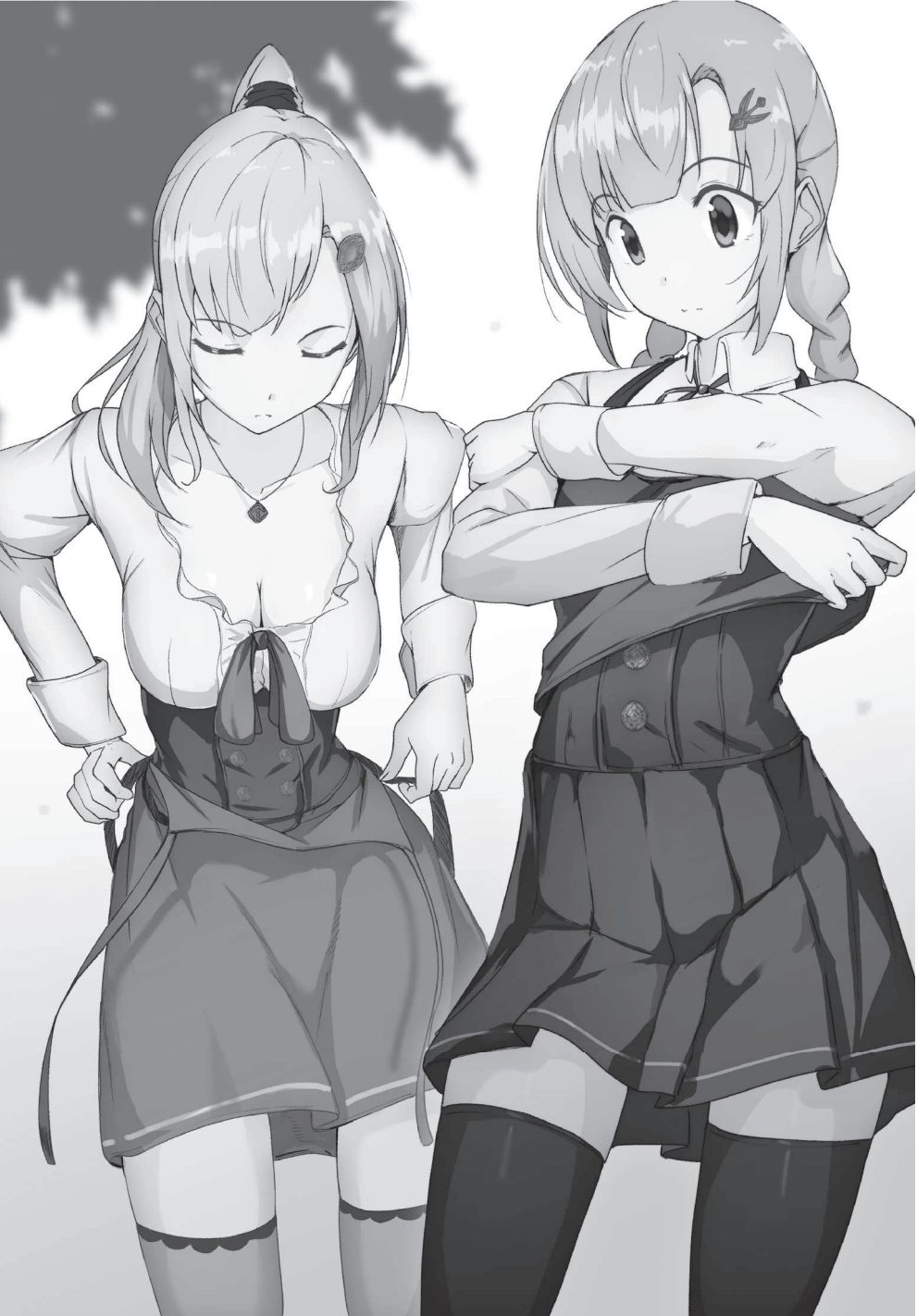
しばらくすると、二人が山程の料理を作って戻ってくる。二十人分はあろうかという量を次々机の上に並べ、三人はこの農家に押し込んだ目的である食事を取る。

ステイナとアイリの二人は調理に際し、この家にあつたエプロンを借りていた。

調理の際の汚れを気にしたのではなく、逆に服の汚れが食べ物に付くのを嫌ったのだ。長袖も肘上までまくりあげている。

そのまま食べればいいのだろうか、二人は何故か食事の前にエプロンを外す。習慣なのかもしれない。ステイナは手馴れた所作ですると後ろの紐を外し、小さく身震いしながらエプロンを引つ張る。まずは仰け反り、次に上体を僅かにかがめながらそうするステイナの、腰つきが奇妙な程に艶めかしい。家事を行う母から、愛を紡ぐ女へと切り替わる瞬間とでも言うべきか。

アイリからはそういった色気のようなものは全く感じられない。同じくエプロンを外すのだが、こちらは横着して紐を解かぬまま頭の上にエプロンを引つ張って抜こうとする。顔の横に紐がひっ掛かり、んー、と引つ張り上げると、髪が乱れ落ちるのと共に一気にすっば抜けた。その瞬間、えへー、とばかりに、にっこり笑うアイリ。



そして、思わずそんな二人を凝視してしまいうエルケル。やはり彼も見目麗しいものには惹かれるのである。

イエルケルはそんな自分に気付いて目線を逸らし、食事を口にする。蒸した芋だ。上にバターがつけてあるこれが、妙に口当たりが良く、ひよひよいけてしまう。

「これは二人が作ったのか？ 何とも、芋が実に芋っぽく、本当に美味しいなこれ」

アイリが嬉しそうに答える。

「ええ、ステイナの料理は最高です。所謂高級食材を用いたものはそこそこですが、こういった素朴な食材を使わせると、実に見事に調理してみせるのです」

褒められても特に感慨もないのか、ステイナはつまらなそうにサラダをつまむ。

「貧乏性なんですよ。せっかくの食材なんだから、少しでもマシなものにと思ってしまうのです。高い食材は特に手間をかけなくてもおいしいですしね」

そしてこの話題は好きではないらしく、すぐに別の話を振るステイナ。

内容はその後どうい道を使って脱出するかだ。

ステイナとアイリは相談する風を装いつつルディエット山を越える道が良い、と結論付ける。

イエルケルはそこに不自然さを感じるも、この場ではまだ口には出さず。

脱出路が決まると、ステイナは思い出したようにイエルケルに問うた。

「そうそう、一つ聞き忘れてたわ。殿下、よろしいですか？」

イエルケルはひたすら芋を食べながら二人の相談を聞きに回っていたのだが、話を振られたのな

ら答えるに吝かではない。

「ああ、構わないよ」

「そもそも何故あの蛙親父は殿下を？ 正式に使者として来た殿下に手を出す意味がわからないわけでもないでしょうに」

「か、蛙で……私にも彼が叛いた理由はわからんよ。ただ現状で辺境が叛くには相応の後ろ盾が必要だろう。王都から離れた地域同士は繋がりが強いとも聞くし、ここだけの話ではないのかもしれないな」

アイリは豆のスープを満面の笑みで飲み干した後で、話に加わる。

「今である理由はあるのですかな？ 私は殿下が何を視察に来たのかすら聞かされておらんのですか」

「地方領主が所有出来る武具の量には制限があるだろう。それを確認に来たんだ」

イエルケルの話を聞いてステイナは得心したらしく、うんざり顔であった。

「殿下、その、言いくいのですが、もしかして宰相閣下に疎まれておりませんか？」

「宰相閣下に？ 私が？ 確かに私の兄に当たる方だが、現在王家には私の兄弟姉妹だけでも三十人以上居るのだぞ。母の身分も低い私のことなど覚えてすらおるまい」

「でもですね、殿下を生贄に捧げたとすれば納得はいくんですよ。本来、地方領主の武具視察なんて滅多に行われません」

「そうなのか？」

「律儀に武具所有制限を守っていると規模の大きい盗賊団などが出た場合、対応出来なくなる恐れがあります。その時は王都に援軍要請をすればいいとなっていますが、そんな面目を失うような真似、断じて認められるはずがありませんから、各地の領主は自前でそれなりの兵も装備も揃えているものなのです」

「……………にもかかわらず私が派遣されたと。叛く準備が整っていた彼等を挑発する……いや、準備が整う前に行動させるためか？」

ワインを豪快に流し込みながら肩をすくめるステイナ。

「細かい部分は何とも。ですが、それならば私とアイリが派遣されたのも理解出来ます。私達が消えれば喜ぶ人にも心当たりはありますし」

「恨みでも買っているのか？」

「そんなところですよ」

ステイナは投げやりにベーコンをほおばる。

「潜在敵の炙り出し兼余った王族の口減らしってところでしょか。流石は宰相閣下、無駄のない手を打ちますね」

ステイナの言葉に、まだ納得のいかぬイエルケルは、フォークを豆に刺そうとして失敗して豆が皿の端っこにまで飛んでしまい、もう一度挑戦中である。

「しかし、何度も言うが宰相閣下には疎まれるどころか口クに会話を交わした記憶すらないのだぞ。恨まれるような真似をした覚えも……」

そこでふと思いつく。

「……あー、例えば、元帥に恨まれてたりしたら、こういう目に遭うこともありえるかー。うん、ありえるなー、はははははー」

焼いた肉に塩をふっていたアイリが、驚きのあまり勢いよくイエルケルの方を向く。

「殿下は元帥閣下に恨まれていると？ それは、また剛毅な……宰相閣下と権勢を二分する方ですぞ」

「うん、あの方のお孫さんをな、騎士学校の試合で完膚なきまでに叩きのめした。ソイツの捨て台詞が『このままで済むと思うなよ！』だったんだが、まさか元帥閣下がそんな程度のこと口出して来るなんて思わんしなあ」

つい先日、元帥に対し感謝のあまり涙を流しかけたイエルケルだが、そんな無垢な過去の自分を殴り飛ばしてやりたくなる。

更に、元帥の孫であるところのヘルゲの態度が妙であった理由も合点がいった。アレは間違いないイエルケルがハメられることを知っていたのだから。

ヘルゲに対しては腹が立つのと同時に、少し気味が悪くもなる。ここまでするか、というのがイエルケルの率直な感想であった。

三人はかなりの速さで食事を進めていくが、その最中、表から声が聞こえてきた。

「おい！ 誰か！ 誰かおらぬか！」

アイリとステイナが同時に部屋隣の四人、の中の父親をじろつと睨む。

緊張した様子でアイリが問う。

「誰だ？」

父親は震えながらも必死に口を開く。

「は、ははっ、あの口調は、へ、兵士の方ではないかと」

ステイナが席を立つ。

「アイリ」

「わかっておる」

アイリもこれに続き、二人は家の入り口に向かっていった。

扉を開く音と、大きなものが落ちた音。何かを引きずる音と、二人の声。

「……しかし、ここの兵の弱さは尋常ではないな。これが元とはいえ栄えあるカレリア兵であると思うと気分が悪い」

「そう？ 何処もこんなものでしょ。あの城の兵士達だってお話にならなかったし」

「あれが一番気に食わぬ。あのような弱卒が辺境領主直属の精兵だなどと」

「アンタは軍に夢見すぎなのよ。大体……」

部屋に戻った二人は、それぞれ一人ずつ、首があさったの方を向いた兵士を引きずっていた。四大家族の怯えが頂点に達するも、二人は全く気にならないらしく、部屋に適当に転がした後席について食事を続ける。

イエルケルは流石にこれは見て見ぬフリは出来ず、一言告げる。

「もう少し彼等に配慮してはどうだ？」

アイリはきよとんとしている。どうやら死体を部屋に放る行為に彼等が怯えるとは思っていなかったらしい。

ステイナは人の悪そうな顔で笑い、言った。

「わかりましたわ殿下。ねえ、農民さん。兵士の身ぐるみは貴方達で剝いでいいわよ。私達こそまでお金には困ってないし」

「もう強盗そのものだよなその発想!？」

ともあれ、つつがなく食事は終わり、三人は家をとにする。最後にイエルケルは、本当に申し訳なさそうにしながら彼等に追加でもう一枚銀貨を渡していた。



Ultimate female warriors
don't beg for her life....

第二章

Chapter 2

イエルケル達三人は、馬に乗って街道をひた走る。

ステイナは機嫌良く言う。

「殿下の剣、お見事でしたよ。正直に申しまして、騎士学校でどれだけ優れていると大したことはないと思っていたのですが、どうしてどうして見事な技でした」

イエルケルは害虫を噛み潰したような顔をした。

「君達二人の剣を見せられた後でそう言われてもな。君達程の剛の者、私はこれまで見たことがないぞ」

イエルケルの言葉にアイリはわかりやすく喜ぶ。

「そっ、そのようなことはありませんまい！ ほ、ほらっ、騎士学校には国一番と噂のダレンス様がいらっしやるではありませんか！」

少し複雑そうなイエルケル。

「……これはあまり口外しないでほしいが、恐らくお前達の方が強い」

何か察するところがあつたのか、ステイナは容赦なくつつこみにかかる。

「もしかして、手合わせなされたので？」

「やった。負けた。次は負けん」

その時のイエルケルの表情は、虚勢を張っているのでもなく負けただけを悔しがっているのでもなく、むしろ次勝ててしまうことを残念に思っているように見えた。

その心持ちを、ステイナは好ましいものと思えた。

「強者との手合わせがお望みならば、何時でもお声掛け下さいませ。絶対に越え得ぬ壁として立ちまだけたっておみせしますわ」

不遜極まりない言葉であるが、イエルケルもまたステイナのそんな心配りを、好ましいものと思えたのだ。

「なら見事脱出出来たら頼む。兵士をゆっくり斬ったあの剣を是非もう一度見たい」

アイリはもつとダレンスの話を聞きたそうにしていたが、自分の方が強いと言われてそれを何度も問い返すのもどうかとも思いますが、まあいいと見做している。

イエルケルは気付かずによく次の話題に移ってしまう。

「先ほど民家で話していた脱出路なんですが、あれはどういう意味だ？」

不明瞭な言い方であるが、ステイナにはすぐに通じた。

「一応あれで陽動のつもりです。まさか言った通りルディエツト山を越えて行くつもりはありませんよ」

彼等一家がどれほど怯えていようと、三人が出て行った後、兵士達にイエルケル達の会話を告げないわけがない。

アイリも真面目な話になったので、もじもじするのをやめて真顔に戻る。

「連中では絶対に後を追って来れぬ道があるので殿下。とはいえ、そこまでの途上に兵を配されても面倒ですからな」

イエルケルも脱出路は幾つか考えていたのだが、どれも幾度かの強引な突破を前提にしなければならぬものばかりだ。

「もったいぶるな。私はまるで思いつかなかったんだが、どんな道なのだ？」

ステイナは、人の悪そうな夕子の悪そうな、それでいてステイナにはびたりとはまると形容出来る、口の端を大きくひり上げた笑みを見せる。

「ラノメの山を越えて行きますわ」

ラノメ山は、辺境区と本領とを分かつ山であり、国中を見渡してもここほど険しい山は他にない。

険しい斜面、行く手を阻む大樹林、山中深くには魔の泉があるとされ、他所では見られぬ凶暴で巨大な熊も多数生息すると言われている。

どんなに山に慣れた者でも、この山に足を踏み入れることはない。カレリア王国内で唯一、人の手の届かぬ、地図が作成出来ない土地なのである。

イエルケルは一瞬何を言っているのかわからなくなり問い返そうと思ったが、何か考えがあるのかと思いなおし言葉の続きを待った。

しばしの無言。続きなんてなかった。

「ちょ、ちょっと待て。ラノメ山を越えていくというのか？ あそこはそもそも道なんてないだろうに」

すぐにアイリが種明かしをしてやる。

「はい。ですがあの山を私とステイナはよく知っています。道、とはとても言えませんがあの山で我々が迷うことはありません」

イエルケルはそれでも納得出来ない。

「あの山は周辺地域だけで毎年数十人の行方不明者を出してるんだぞ。周辺ですらその有様なのに、山を越えていこうなどと無茶にも程があるう」

アイリは事もなげに言う。

「ご心配には及びませんが、殿下は我等が背負って行きます故。何せ二人居ますからな、交互に運べるなどと楽すぎて欠伸が出来ますぞ」

イエルケルは勢い込んで反論しようとして思い留まり、ちらとステイナの方を見る。

ステイナは笑いを堪えながらフオーローしてきた。

「アイリは本気ですわよ。そして、本当にそう出来ます。私達はこの山で鍛錬していたのですから」

どんな顔をしていいのかわからないイエルケルは、二人の発言を自分の中で納得出来る形に納めようともがいてみる。

「……実は、言う程危険な場所ではないのか？」

ええ、それほどでも、と返すアイリと、真顔になるステイナ。

「熊を倒せないのなら決して近づいてはなりません。他にも山道や崖に……ああ、いえ、無理ですね。私達抜きなら絶対駄目です近づいては。溜まっている水を飲んだら死ぬ毒の泉や近寄るだけで死ぬ毒煙の窪地があつて、山を越える一番楽なルートでも一回は崖登りしなければなりませんし、ええ、無理です」

怪訝そうにアイリ。

「そうか？ 我等でも三月で概ね慣れたであろう」

「その三月で何度死に掛けたと思ってるのよ。アンタなんて崖下に落ちて身動き取れなくなって餓死寸前だったでしょうに」

「はっはっは、そんなこともあったのう。あの時はステイナが山に居てくれて本当助かったぞ」

「笑い事じゃないでしょ……あの崖私も落ちたし、まともに登れるようになるのに一年以上かかったわよ」

イエルケルは至極当然な疑問を口にする。

「崖から落ちたら普通死ぬのではないか？」

アイリとステイナは同時に答えた。

「鍛えてますから」

宰相であるアンセルミ王子の執務室はカレリア王国にとって最も重要な決定を下す場所であるが、とてもそうとは思えぬ程質素で簡易な造りになっている。

また彼は衣服も奢侈しじなもの好まず、出来るだけ装飾を抑えたものを用意させる。それでも母譲りの秀麗な容姿は霞かすむことなく、最近は更に地位がゆえか、年の若さに似合わぬ威厳いげんのようなまで感じられるようになってきた。

「ふむ、これが今回の策の全容だな」

王子の前には三人の補佐官が控えており、その中で最も王子の信任厚いヴァリオという細身の青年が、要点をまとめて口頭で報告する。これを聞きながらアンセルミは書類を斜め読み。

アンセルミが書類をめくる手を止める。

「ん？ おいヴァリオ。確か私の弟で騎士学校を主席で卒業した者がいたな。アレの名前は何というんだったか？」

「イエルケル殿下です」

「……ちよつと待て。何故そのイエルケルをサルナーレへの視察に使うんだ。他にどうでもいいのが山程居るだろうに」

「さあ、私に言われましても。この件は宰相閣下が元帥に全てお任せしたのでは？」

「いやまあそうなんだが。どうせならもつといらん奴がにやらせてくれればいいものを……おい、もしかしてイエルケルは元帥の恨みでも買ったか？」

不自然な裁定には大抵立場の強い者の恣意しいきが絡からんでいるものである。

「滅多めったなことを言うものではありません。が、元帥お気に入りのお孫さんがイエルケル殿下と騎士学校の同期であったかと。殿下が主席ならば、彼はそれ以下でしような」

こめかみを押さえるアンセルミ。

「元帥はあの内戦以来衰える一方だな。元帥に回す仕事、絞れるか？」

「難しいでしょうね。自身が衰えたとして、元帥の権勢は一切揺らぎませんから」

「誰だれか元帥を論とせるような者は……居るわけないか」

「宰相閣下ぐらいいですな、そんな真似まねが出来るのは。おかげで軍事に関する様々なことがとどこおり始めております」

がつくりと首を落とすアンセルミ。

「……なあヴァリオ。兄上から政権を奪って私が宰相になれば、執務はもつと楽になるって言わなかつたっけか？」

「なつたでしょうに。相手をするならウルマス殿下よりよほど元帥の方がマシですよ」

「お前、いずれ俺おれがクビにしてやるから、その時は何処どこぞで詐欺師でも始める。事務官やつてるよりよほど似合ってるよ」

アンセルミの嫌味を無視するヴァリオ。

「で、どうされます？ 元帥に抗議して今から救助に兵を回しますか？」

「出来るわけないだろう。これから国内の掃除をしようという時に、あの方と採もめ事ことなんて起こせるか。そもそも今からでは間に合わん」

「ではこちらが私怨に気付いているということだけ伝え、釘を刺しておきましょう」
「それで大人しくなってくれればいいのだが……」

一度でも発見されてしまえばたちどころに辺境兵が三人を取り囲むだろうが、先の陽動が効いたのか追っ手に見つかるとはなかった。

三人はそのままラノメ山中へと足を踏み入れる。

馬があるので楽ではあるが、林の中を進むので速度を出すことも出来ず、また足場が悪いことから騎手も神経を使う。

アイリもステイナも、山中をまるで迷いなく進む。

イエルケルがそろそろ馬ではキツイか、と思い始めた頃、ステイナが馬をおりるよう言ってきた。これ以上は馬では無理だと。

そこからは徒歩での登山になる。道らしい道もないので、アイリとステイナが先頭に立ち剣で藪を切り開きながら進む。

それでもイエルケルにはキツイ山道だ。

斜面で足場が悪いのに、草木で足元が見えないのが特に辛い。とはいえ女二人がよりキツイ仕事をこなしながら進んでいるのだから文句を言う気にもなれない。

しばらく歩くと、切り立った崖に出る。そこでステイナは休憩を申し出てきた。

「一休みしましょう殿下」

「気を使っているのか？ 私ならばまだ余裕はあるが」

「ええ、それには少し驚いております。ここまで私達のペースについて来られるのは大したものだと思いますよ。ですが、この先は難所の一つですので」

ステイナがそう言うのなら、とイエルケルは勧められるがままに岩の上に腰掛ける。

アイリと比べてステイナは比較的常識的な考えをしている、と思えたからだ。

「難所は全部で何箇所になる？」

「そうですね、殿下の体力がわからないので何とも言えませんが、概ね三箇所。最初の一つがココです」

「はい……」

ステイナは頭上を指差す。

「そう、この崖に登るんです」

イエルケルは頭上を見上げる。

首が痛くなる程上を向かねば頂上が見えない垂直な壁を、登れというのだ。

やはりステイナも非常識だった、とイエルケルは上を見上げたまま思うのであった。

下を見るな、そう言われて登り始めた崖であるが。そもそも壁に張り付くような姿勢でどうやって下を見ろというのか。ステイナが先行しながら、手足を掛ける場所の見本を見せてくれているの

で、イエルケルは必死にこれについていくだけで。

見上げるステイナはいとも容易く手を伸ばし、軽々とその身を持ち上げていつているが、イエルケルにとってはただ腕を伸ばすだけでも多大な労苦を伴う。体中の筋肉が張り詰めているのがわかる。この状態を長時間続けると後でエライことになるのも。だが、だからと力は一切抜けない。特に腕。体を持ち上げる時はもう完全に腕の力のみでそうしている。そして持ち上げ終わったからといって気を抜くことは許されない。腕で全身を支えながら足場に足を伸ばし、体重をそちらにも分散させて初めて少しだけ腕の力を抜けるのだ。

腰に巻いた縄はステイナとアイリと繋がっている。アイリはイエルケルの下。イエルケルが落ちれば二人に物凄い迷惑が掛かる。そう考えると、どうあっても失敗するわけにはいかない。イエルケルは早く終われと祈りながらこの作業を繰り返す。

途中からは、あと少しと考えると少しでないことにヘコむので、先のことなぞ何も考えず次は何処だ、しか考えないようにした。汗が滴り落ちるのが鬱陶しい。伸ばした腕の先の手の甲が汗でてらてら光っている。多分、袖の中の腕も汗でエライことになっている。その汗が手の平に伝ったらどうしよう、と気になり始め、どうしようもないという結論に達すると、そうなる前に何としてでも登りきらなければと焦る。勢いよく体を引っ張り上げる度、汗が大きく跳ねるのが恐ろしい。イエルケルは、汗、手につくな、とそれだけを念じながら手を伸ばし、足を出し、ステイナの後を追いつける。

不意に、ステイナの姿が見えなくなる。大いに焦るイエルケル。ステイナは？ 落ちた？ 縄に

は反応なし。代わりに首を伸ばしかけたところで、上から声が聞こえた。

「殿下！ ほら！ あと少しっ！」

それがステイナのものであったことに安堵し、言われるがままにあと少し、頑張って手を伸ばす。掴む。が、ステイナのことに驚いたため最後の最後で汗のことを忘れてしまっていた。汗で手が滑り体を支えるには握力が足りない、とイエルケルは他人事のように思った。

下から足を押す力が加わり、上からは手首を掴み上げる力が。

「大丈夫です殿下！ さああと身体一つ分ですぞ！」

「引っ張り上げますから合わせてっ！」

せーので最後の一登り。イエルケルは崖の上に転がり込んだ。

腕が痺れ、息が乱れ、どうしようもなくその場に倒れ込んだままのイエルケル。

そんなイエルケルをアイリが満面の笑みで上から覗き込む。

「いやあお見事！ 最後に気を抜いたのはご愛嬌として、まさか一度も手足を踏み外さず登りきるとは！ 殿下も騎士学校で充分に鍛えてこられたようですね！」

ステイナも頬を緩めている。普段の表情にあまり愛想というものが感じられない分、こうして好意的な視線を向けられると、それだけで驚く程可愛らしく見えてくる。

「本当、見直しましたわ殿下。ここを単独で登れるのなら残る二箇所も自力で突破出来ます。殿下はラノメ山を単身で突破出来るのですよ！」

褒めてもらって嬉しいは嬉しいのだが、それ以上に、あと二回もこれをやらなきゃいけないのか、

と絶望的な気分になるイエルケルであった。

イエルケル達三人は、現在山の尾根筋に沿って歩いてきた。

まず尾根の進行方向右側には視界を遮る岩もないまっすぐな斜面が続く。見るだけなら、ここを滑り進むのが楽なんじゃないかという気になるが、命は惜しいので絶対そんな真似はしない。

進行方向左側は日の光が当たらず薄暗くなっている、こちらは右側に比べればまだ斜面の角度も急ではないのだが、ある程度行った所でその先が消えている。いや、見えないだけであるのだろうが、その先はより急な斜面か、もしくは崖か。いずれロクでもないものがあるだろうと予測される。景色は良い。ラノメ山はカレリア王国で最も高い山であり、その山頂付近に居るのだから、言うなればカレリア王国で最も高い場所にいるということだ。

また眼下に広がる壮大な風光明媚さが細部に至るまでくつきりと見えるのは、惜しげもなく降り注ぐ陽光が故だ。ステイナが、運が良い、と言っていた天気の良いさのおかげで、風は強いがそれ以外に空よりの妨害はない。

ステイナとアイリの二人は散策気分で尾根を歩く。残るもう一人、イエルケルだけはそんな暢気な気分にはなれないが。

「……臆病者の誇りを覚悟で言わせてくれ、二人共。この地の風は、これ以上強くなることはあるのか？」

びゅうという風切り音のせいで声がよく聞こえないので、イエルケルは大声で泣き言を漏らす。イエルケルが心底から怯えているのがわかっていたか、ステイナは意識して真面目くさった声になる。

「今日は天気も良いですし、しばらくはこのままの風でしょう。もちろん、時間が経てばその限りではありませんし、今の風の強さは幸運故と考えて下さい」

イエルケルの顔がより引きつったものになる。現状の風の強さですら、イエルケルは歩きながら姿勢を維持するのに大変な労力を要しているのだ。もちろんここでバランスを崩せば尾根から滑り落ち真つ逆さまだ。崖から落ちても鍛えてるせいで無事な人間もいるらしいが、イエルケルはどれだけ鍛えようとその域に達せる気がしない。

「こ、これが、ふ、二つ目の難所か。まったく、生きた心地がしないぞ」

ステイナはアイリと顔を見合わせた後、取り繕うように言った。

「え、ええ、そうですね……その、殿下は山歩きはあまり経験がないので？」

「領地の側にあつた私がよく訓練に行っていた山なぞ、こと比べれば盛り土と変わらんだろうよ。こんな所、よくもまあ歩こうという気になったものだ」

アイリが何かを言おうとしたのを、ステイナが目線で止める。ステイナは勇気付けるように言った。

「尾根はそれほど長くはありません。もう少しの辛抱ですよ」

苦笑いで答えるイエルケル。ステイナは少し考え込んだような表情になった後、おずおずとイェ

ルケルに訊ねる。

「あの、殿下もしかして……」

そこで尾根の遥か上空を漂う雲が、イエルケルの頭上に影を落とす。同時にこれまでで一番の風が真横より吹き付けてきた。

それは崖を登ったりする方がよほど大変な程度の、大したことのない風であったのだが、こんな夢にも想像しなかった程の高い場所を生まれて初めて歩き、恐怖と緊張で硬くなっていたイエルケルの体勢を崩すには充分なものであった。

イエルケルが、あれ、と思った時にはその両足は大地を離れていた。

「殿下!？」

人生において強風に吹かれ宙を舞うなどという経験をした者などそうはおらぬだろう。心地良いとすら感じられる浮遊感に身を委ねながら、イエルケルはほんやりとそんなことを考えていたのだが、斜面に落下し激突した瞬間暢気な感想は吹っ飛んだ。

まず真っ先に思ったことは、下がらない、である。通常なら手なり足なりをつけて転がる勢いを止めるのだが、そのつくべき地面がないのだ。あるのは壁だけで、これを掴もうにも転がる速度が速すぎると角度が悪いのとまるで上手くないかない。

既に転がる速度はイエルケルが制御出来る速さを越えている。右も左も上も下もない。あちらこちらから次々と壁が追って来てイエルケルにぶつかってくる。もう痛いのが足なのか腕なのか頭なのか胴なのか。それに今は痛いより恐ろしいだ。こんな速さで転がって、止まってしまう程の何か

に激突したらエライことになる。

止まれ、でも止まるようなモノの先にあるな、と一見矛盾したようなことを真剣に祈りながら斜面を転がっていくイエルケル。崖下の様子も思い出せぬ程動転しており、聞こえてきた声の意味がすぐには理解出来なかった。声はすぐ近くより発せられていた。

「殿下! 下は川よっ! 下手したら死ぬから気合い入れて下さいね!」

直後、脇腹に今まで味わったことのない、信じられぬ程強烈な衝撃が。

全身は大きく宙を舞い、そこでようやく、イエルケルは自らの現状を理解することが出来た。長く続く斜面が見える。ずっと奥に山の尾根が見え、自分がそこから転がってきたのだとわかる。そして、今いるのは空中高く。斜面は途中で途切れ、その先は深い谷になっている。その谷底に向かつて、現在イエルケルは落下している最中であつた。

重苦しい轟音は耳元を風が切る音。風がこんなにも不気味で恐ろしい音を鳴らすなんて知らなかった。そんな聞くに堪えない騒音に混じり、透き通った高音が聞こえる。

「殿下! 足を真下にまっすぐ伸ばして! 水に落ちるよう蹴飛ばしたから後は着水失敗しなきゃ何とかなる!」

ああ、あの最後の瞬間のアレ、君が蹴飛ばしてくれたのかこんちくしょう、とか思いながらも言われるがままに体を伸ばす。そして、何故に君までココにいるんだと言い返そうとしたところで、イエルケルの意識は完全に消失した。ここまで堪えてきたのが奇跡のようなもので、流石に着水の衝撃まで耐えるのは無理があつた模様。

イエルケルはぼんやりとした頭のまま、首を小さく動かし周囲を見渡す。寝心地は最悪。背中が痛いのは寝ているのが地面の上だからだろう。土の臭いと草の香りがびつくりする程強く、よくもこんな場所で眠れたものだと自分に感心する。

すぐ近くでばたばたと人の動く音がする。

忙しないな、と苦笑する。どうせ同期の誰かが寝坊したのだろう、と寝ぼけ頭のイエルケルは騎士学校の宿舎に居るつもりで、そちらに首を向ける。

「……………わーお」

同期は女に化けていた。それが誰なのかわからないが、とても魅力的な女性に見える。いや、むしろ女が同期に化けていたという方が相応しいか。だとしたら、ヘルゲの正体がコレだという洒落しやれにならない事態もありうる。

女は物凄い焦った様子で服を着ようとしている。良かった、と安堵するイエルケル。彼女の機敏な所作はヘルゲのそれには見えない。

イエルケルが見た時既に彼女は下着をつけていた、或いは最初から下着だけは着ていたのかもしれない。後は上着とズボンを穿はくだけである。見ていて感心するような手際の良さでこれを身につけ、彼女はこちらを振り返る。

イエルケルと目が合った。彼女は、ステイナだ。イエルケルに付けられた部下で、騎士見習い。

そこまで思い出したところで、イエルケルの顔から血の気が引いていく。

「うおっ！」

そんな悲鳴と共に大慌てで顔を背そむけるイエルケル。後ろ頭に向かって、少し照れたような声が届いた。

「…………いや、全部見といて、今更何してるんですか…………」

地面に座ったままで背中を見せながら、イエルケルは必死に言い訳する。

「ち、違うっ！ てつきり同期が居ると思つてそちらを見たら、まさか女性が居るなんて思わなくて！ す、すぐに顔をそらさなかつたのは…………えっと、あれだ！ そう！ ……………なんていうか…………」

言い訳、即座に思いつかない模様。後ろ頭に嘆息する音が。

「はあ、まあ油断してた私も悪いですけどね…………でも、こつちも濡ぬれたままの服着てるの気持ち悪かつたんですよ」

意識がはつきりしてくると、色々と状況を思い出してくる。イエルケルは斜面を滑り落ち崖から空を飛んだのだ。なのに何故生きているのか、それが不思議でならないので率直そつちよくに疑問を口にしてみる。

「なあ、ステイナ。私はどうして生きているんだ？」

もうその必要もないだろうにそっぽを向いたままのイエルケルに、ステイナは同じく地面に腰を下ろしながら現状を説明してやる。

「川に落ちたんです。すぐに私が引き上げましたから溺れることもなかったですしね」
少し考えた後で訊ねるイエルケル。

「……それはつまり、君も崖から落ちたってことだよな」

そう言った後で、このままだと話しにくいのでおそろおそろ後ろを振り向く。ステイナは右側に両足をそろえるように折り畳みながら座っていた。

「下は川ですし、殿下も川の深い場所狙いましたから、大丈夫とは思ってましたよ」

色々自らの常識に照らし合わせ言いたいことのあるイエルケルであったが、実際無事であるので文句を言いつらい。

それに、と山に入ってからステイナを思い出す。崖登りではイエルケルに合わせてその道しるべとなり、冷静さを著しく欠いていた尾根を歩いている時も何かと気にかけてくれ、挙げ句崖から転落したら一緒に落ちるなんて真似までしてくれたのだ。

居住まいをただした後、小さく頭を下げるイエルケル。

「本当に助かった、ありがとう。ステイナには山に入ってからずっと世話ばかりかけているな、すまない」

ステイナは、俯き加減にじつとイエルケルではなくその前の地面を見つめる。

「……責めないんですか、私のこと」

「責める？ 何故だ？」

「もっとマシな道を選んでいれば、もっと危険の少ない助け方があったはず、もっと言えばこんな

山の中通ることをしなければ……とか」

イエルケルはステイナの表情を覗き込んでみる。

「……もしかして、気にしているのか？」

「少し、ですが」

ちろつと、上目遣いにイエルケルを見上げるステイナと目が合った。

小さく噴き出すイエルケル。

「そこで少し、って返せるぐらいなら、そこまで深刻に考えてるわけじゃない、って受け取っていいんだよな？」

「……私が悪いとはあまり思っていない、つてのが本音ではありません。でも……」

「私も今の自分が置かれた状況は把握出来るつもりだ。まともにやったら、私が国に帰るには死体になるぐらいしか手はない。だから君達の無茶な案にも乗ろうって思えたんだ。それに……そう、わかっているさ。崖から落ちたのは、完全に私の不覚だ。怯え竦んで崖から落ちるなんて、自分でも情けなくて涙が出てくる」

勢いよく顔を上げるステイナ。

「いえっ、昔、あの山に初めて登った時のことを、忘れていた私も悪かったです。もう慣れましたが、私も最初は怖くて怖くて仕方がありませんでした」

その言葉に驚くイエルケル。

「君がか？ それは私を慰めようという話ではなく？」

「人を何だと思ってるんですか。私だって人並みに怖かったり逃げたくなくなったりすることだってあります」

まるで想像出来ないといった顔で、ほへーと息を漏らすイエルケル。

「では、私も鍛えればいずれアレが怖くなくなる日が来るのかな」

「それはもう。側に意地を張る相手が居たりすれば、その日はより近くなりますわ」
なるほど、と頷くイエルケル。

「アイリのことか、彼女もまた怯えることがあるのかな。……ははっ、怒るなよ？ 君が怯えたという話よりよほど彼女が怯えたという方が想像はしやすいかもな」

イエルケルの軽口に、ステイナは口を尖らせる。

「ほんつともうっ、殿下は私をどー見てるんですか。それに、あの子は最初から山の頂にも、急斜面の崖にも、一切怯えることなんてありませんでしたわよ。熊と初めて遭遇した時だって笑ってたんですから、あの子」

「……………彼女は一体どーいう人生を歩んできたというのだ？」

「さあ。いえ、聞きましたよ当人から？ でも、彼女が送ってきた人生と同じ道を歩んだとしても、私はアレになれる気欠片かけらもありませんわ。どんな危地にあってもあの子、自分が死ぬとか全く想像だにしないみたいなんです。だから何物をも恐れないし、そのくせ怒られることを妙に怖がったりするしで、もう私にもどうしていいのやら」

怪訝そうな顔でステイナに顔を寄せ、小声になるイエルケル。

「そんなこと出来る奴、本当に居るのか？」

同じくイエルケルに顔を寄せ小声で答えるステイナ。

「いや、信じられないのも無理ありません。私だってあの子以外で見たことないですもの」

世の中には凄い奴が居るもんだ、と感心するやら呆れるやらイエルケルは、はたとそこで、ステイナのびっくりするぐらいに整った顔がすぐ側にあることに気付き、大慌てでその場から飛びのく。いきなりな動きにステイナは小首を傾げる。イエルケルは後ろにずり下がったところで、言い訳がましく言った。

「い、いやな。ステイナ、君は何だか妙に話しやすくてな。つい、その、年来の友人であるかのようにに振る舞ってしまう。申し訳ない」

手をばたばたと振るステイナ。

「あははっ、それは私もですよ殿下。というか殿下、私かなり失礼な発言してると思うんですけど、文句一つ言ってこないどころか、まるで気にしてないように見えるのはどういうわけなんですか」

「あー、やっぱりそれ自分でもわかってたか。私としては、それぐらい言ってくれる方が気が楽なんだよなあ。それってつまり、私もそこまで言っていいってことだろ」

ステイナは愉快そうに大きく笑う。淑女に相応しいとは思えないが、その朗らかな笑みはイエルケルが思わず目を丸くする程に美しかった。

「そういう所ですって、殿下には本当に王族らしからぬ方ですよねえ。貴族っぽさすらありません

んもの。こんなに気楽に殿方とお話出来るのって、もしかしたら家族以外では初めてかもしれないわ」

彼女にそんな笑みを浮かべさせたのが自分であると思えるのが嬉しくて、イエルケルもまた大きく声を出して笑う。

「よく言われるよっ。君と一緒に変だというのは自覚あるんだからあんまり言ってくれな。これで結構気にしてるんだぞ」

いたずらっぽく上目遣いにイエルケルを見上げるステイナ。

「そっちは本音っぽいですね。でもまー、自身の性質なんてそーそー変えられるものじゃないんですし、諦めましょう、一緒にっ」

「っだー、変な誘惑をするなっ。まったく……ちなみにステイナ。君のその奔放な口ぶりは、相手を選んでのことであるよな？」

「……一応は」

「おいっ。もしかして失言多い口か、君は」

「……その……つい。ほら、口について出ちゃう言葉ってあるじゃないですか。馬鹿を相手にした時なんて特に」

「馬鹿を相手にする時こそ失言には気をつけなきゃならんだろうが。……うん、まあ賢い相手にもやっぱり気をつけるべきではあるけどな」

ぶー、と口を尖らせるステイナ。

「どーせ、私は殿下みたいに人間出来ていませんよーだっ」

「拗ねるなっ。くっそ、可愛いなそれ。もしかして計算づくか？」

ステイナはしれっつと答える。

「それもあります、お父様はこれで何時も言いなりでした。でも何か殿下ってそーいうの通じなさそうな感じがします。もしかして見た目のさわやかさとは裏腹に夜は暴れん坊だったりします？」

「馬鹿言うな。私はこれでも王子なわけな、山程居る姉や妹の中に仲良くしていたのもいるんだ。アイツ等本当、美人なんだが兄弟の私が引くぐらいヒドイからな、色々」

うわー、とステイナは内容を聞く前から引いている。

「王族の爛れた生活とか、心底近寄りたくないですねえ」

「私だってそーだ。騎士学校に入ったのはそういう理由もある。姉も妹も私のこと、執事が召使かと勘違いしてるからな」

あはは、と軽やかに笑う声がイエルケルへと返ってくる。

「殿下、人がよさそうですから」

「アイツ等がタチが悪すぎるだけで私は普通だっ。騎士になって軍に入ると言った時のアイツ等の顔ときたらもう……あれは百年の恋も一発で醒めるな。ステイナも気を付けろよ、元が美人だと醜悪な表情した時のヒドさがより際立つんだぞ」

最早堪えきれぬと、ステイナはお腹を押さえながら笑い転げる。

「あっははは、覚えておきます。でも、ホント、殿下って面白いですわ。お父様が連れてきた婚約

者候補が殿下みたいな楽しい方でしたら、私もあっさり落ちてたでしように」

「そりゃ光栄だ。だがな、私はやめとけ。長生きは出来ん」

「うーわ、それ自分で言っちゃうんだ」

「……そりゃ元帥閣下にハメられたとわかればなあ。許されるのなら、このまま何処かに逃げ出したいよ」

「殿下がご希望ということでしたら、共に死線を潜った誼よしみですし、山中で死んだってことにしても構いませんわよ？」

「冗談だよ。逃げた後のアテもないし、そもそも私は国を捨てる気なぞない。たとえどのようなことがあると、私は王族である誇りを捨てる気はないからな」

ふふっ、と優しく微笑むステイナ。

「かつこいいですよ、殿下」

「茶化ちかすなよ。アイリはどうした？ まだ崖の上なのだろう？」

「あの子なら走って山を降りて来るでしょうし、そろそろ合流出来ると思いますけど」

走って？ と問い返そうとしたイエルケルは、後方から接近してくる音に気付く。大地を蹴けり草木を踏み潰す軽快な音は、あっという間に側まで近寄ってくる。

獣を警戒し腰を上げるイエルケルと、ひらひらと手を振っているステイナ。

「おおっ！ 二人共無事でしたか！」

藪を突っ切って飛び出して来たのは、アイリであった。

足を踏ん張り制動をかけるも、勢いがよすぎて止まりきれず、大地に足で線を引きながら滑る。だからと体勢が崩れることは一切なくそのまま静止する。そして何事もなかったかのようにアイリとステイナはにこやかに会話を始めるが、イエルケルはそうはいかない。

アイリが走って来た方を覗き見てみる。ぶちぬいた藪の奥にも、明らかに不自然な形で草木がよれて道が続いている。嫌がる馬を強引に捻じ伏せ無理矢理藪を突っ切ったらこうなるな、とか考えながらちらとアイリを見る。

イエルケルが考える全力疾走を二倍したぐらいの早さで走って来たアイリは、頬が上気し肩が揺れていて、まあその程度だ。少し怖くなってイエルケルはアイリに訊ねる。

「アイリ、その、何だ、君は何処から走って来たんだ？」

「私ですか？ それはまあ、山の上からですが」

イエルケルは既に薄暗くなり始めている空を見上げる。そのぐらい上を見て始めて、先程歩いた尾根が見えてくるのだ。

返す返すも、とんでもない所から落ちたものだと身が震える。

更に、そこから走って来たと言われても俄には信じられそうにない。本当にそうだとしたら、それこそ身が震えるなんものでは済まないだろう。

「な、なあアイリ。もしかして、君達二人だけなら一日でこの山越えてしまえるのか？」

「はあ、朝出れば夜には抜けられると思いますが……ああっ！ そういうことですか！」

何かを突然納得したかのようにアイリは勢い込んで答える。

「私でもステイナでも、本気で走ればラノメの山ならば半日かかりませんぞ！もしここを越えての伝令をお考えであれば是非我々にお任せ下さい！」

「……本気で走れば？　そもそも山越えて走ったりしたら身が持たんだろうに」
「それは鍛え方が足りないだけです」

しれっと言い放つアイリ。流石に失礼な発言だとステイナが慌てるも、アイリはというとまるでそんなつもりはないらしく、平然としている。

そしてイエルケルはというと。

「凄い、な。そうか、鍛え方だけの問題なのか……」

何故かとても感心したような顔で、むしろ喜んでるようにすら見えるではないか。

「世の中には、不可能だなんて言葉で諦めてしまっている可能性の何と多いことか。そうか、人は鍛えれば何処までも強くなれるものなのだ……いや、感服したよアイリ。これからの鍛錬の励みになるといふものだ」

「ははは、それはよろしゅうございました殿下」

「……そうだよ、私はずっと甘えていたんだ。周囲の連中を馬鹿にしながら、そんな馬鹿にした連中より鍛えているから自分は優れているなぞと……目指す場所があるのなら、他者との比較ではなく己おのれとこそ戦うべきだったのだ」

妙に納得顔のイエルケルに、褒められて得意なアイリ。

ステイナは、うわー殿下も基本筋肉思考の人なのかー、と微妙に引きつつさっさと野宮の準備に

取り掛かるのであった。

野宮の準備といっても、布やら材木やらの装備があるでもなし、平らな場所を見つけてそこで横になって寝てしまうだけのことだ。

野の獣を警戒しなければならぬ土地でもあるのだが、アイリもステイナもそこらへんを全く警戒していない。イエルケルがその理由を尋ねてみたところ、二人は揃そろって言った。

「来たらず目が覚めますから」

イエルケルにはそう断言出来る自信が何処から出てくるものなのかまるでわからなかったが、二人共、むしろ来てくれと言わんばかりの顔である。

「やはりラノメ山に来たのなら、殿下にも熊を味わっていただきたいものだな」

「そうねえ、でもアレもう、私達の前には出て来ないんじゃないかしら？」

「いやいや、我等が山を下りてからかなり経つ。そろそろ我等のことを知らぬ間抜け熊も出てくるであろう」

「いいわねえ、熊、おいしいのよねえ」

畑で芋を掘るんじゃないんだから、都合の良い食材扱いはどうよ、とイエルケルは思ったが、多分二人はどうにでもしてしまうのだろうとも思えたので黙っていた。

代わりに、前から気になっていたことを訊ねることにした。

「なあ、ステイナ、アイリ。間違ってたら申し訳ないんだが、君達の家、アルムグレン家とフォ

ルシウス家は確か……」

あれ、と少し驚いた顔のステイナ。

「殿下、もしかして騎士団で聞いてらっしゃらなかつたんですか？ ウチもアイリの家も先の内戦で叛徒側につき取り潰された家ですわ」

「ああ、やっぱりそうか。じゃあ君達が騎士を目指しているのは、家の再興のためか？」

ステイナはアイリと顔を見合わせ、何と答えたものか少し悩んだ後で言った。

「それが全てではありませんけど」

「そうか……ならば今回の武勲を以てすれば、きつと望みもかなうだろう」

「それはどうでしょうか。私もアイリも敵多いですしね」

やはり少し間を空けてイエルケルは訊ねる。

「失言？」

「違いますっ！ 色々面倒なことがあるんですよっ！」

ムキになるステイナに微笑ましい目を向けてから、イエルケルは改めてステイナを、アイリを眺める。二人共、美人を見慣れているイエルケルから見ても、稀有な程の美しさを持つ女性だと思える。だからこそ、イエルケルは不思議でならない。

「なあ、これは君達の騎士としての適性を疑っているとかそういうことではなく、単純な疑問と
思っただけ聞いて欲しいんだが……」

ステイナは表情を少し硬くし、アイリはきよとんとした顔だ。

「二人の事情はわかつたのだが。こう言っただけは何だが、君達ならば騎士となるより、相應しい夫を迎える方が家の再興は早かつたんじゃないのか？ 君達二人ならどちらも引く手数多であろうに」

ステイナは嘆息するが、それは馬鹿にするというよりは自嘲気味なものであった。

「あー、自分で言うのも何ですが、私、必要以上に女性的魅力があるようで。家が栄えていた時から色々とそういう申し出はありました。ですが、我が家が没落した時、私の身分が失われたと知るや、私を求める人達の層が変わりました」

「層？」

「ええ。それまで我が息子、我が孫に、と言っていたいい年のクソオヤジ共が、息子達を押しつけ私を自分の妾にしようとしたのです。皆ご立派な地位も名誉もお持ちのお貴族様ばかりでして、私を妻にと考えるような若手では競うことすら出来ない相手です」

絶句するイエルケルに、ステイナは吐き捨てるように言う。

「既に貴族ではなく平民であるのだから、妥当な扱いだろう、と。彼等は政治力までも用いて私の貴族復帰の道を断ちに来ました。ついでに家に嫌がらせにも来ましたね。ああ、あと盗賊紛いの連中を雇った方もいらっしやいました」

当時を思い出しているのか、ステイナの表情が剣呑なものに変わっていく。

「一度は、相討ち覚悟でそのクズ共斬り殺してやるかとも思いましたが、どうせ死ぬのならせめて自分が満足して死にたいと思ひまして」

「ふむ」

「山に籠もることにしました」

「は？」

「いえ、私昔から剣術が好きでして。どうせ命賭けで殺しに行くのなら、剣をとことんまで極めてクズ共全員殺せる程の腕を身につけよう」と

「……………」

「どの道貴族復帰を願い出るにしてもすぐというわけにもいきませんでしたし、ならその間に山に行こうと。どうせなら国一番の険しい山で死にかけるまで修行しようとかココに入ったんですわ」

貴族子女のすることではない、とは思ったが、結果コレが出来上がったというのであれば、それは正しい判断だったのだろうと自分に言い聞かせるイエルケル。

「後は復帰を認められた貴族が出るのを待って山を下りたという話ですわ。私より条件が悪い貴族が復帰を許されたのなら、私の申請を無碍に断ることも出来ないでしょうしね」

イエルケルはとりあえず感想を述べてみた。

「何か色々と大味だよな」

「失礼な。アイリに比べれば、私は少なくとも理屈上ではそうズレたことはしてないはずですよ」

「アイリはステイナとは違う理由なのか？」

アイリはステイナ程その話を嫌がってはいないようで、簡単に話してくれた。

「ええ、私はもっと単純です。貴族の位を剝奪されたのは、まあ仕方ありません。ですが、そも

そも父上が戦に負けなければこんなことにもならなかったでしょう」

「そりゃ、確かにそうだが。しかし、一貴族がどうこう出来る戦でもなかったと思うが」

「ならば一貴族でどうこう出来るぐらい私が強くなれば、もうこんな形で爵位を失うことはないでしょう。そう思ったので、私も山に籠もることにしたのです」

くすくすと笑っているステイナに、もしかしてこれは比喩表現か何かかと考えをめぐらせているイエルケル。

「待ってくれアイリ。それは、君一人で軍を撃退する、と言っているのか？」

「如何にも！」

「……………ひゃ、百人ぐらいの軍で戦場を選べば何とか……いやならん。弓使ったらそれで終わるだ。そもそも単身で軍に挑もうなどと、普通は思いつきすらせんと思うのだが……」

「殿下、よくお考え下さい。私は貴族ですらない一介の小娘なので。兵を持つことも出来なければ兵を鍛えることも出来ない。ならば、自分を鍛える他ないでしょう。それに私が一人で軍を駆逐出来るのならば、どんな弱卒を率いることになるかと必ず勝てます。正に必勝の案ですぞ」

腹を抱えてげらげら笑い出しているステイナと、何と声を掛けたものか苦悩しているイエルケル。

アイリが最後にまともに入る。

「私がステイナと同じ時期に同じ山に入ったのは全くの偶然だったのですが、まあそれ以来の仲間のですよ。よもや私以外にラノメ山に籠もろうなどという無茶な者が居るとは思いませんでしたからなあ」

「そうか、安心した。そこは無茶だとわかっているのだな」

「？ 不思議なことをおっしゃいますな。無茶だからこそやる意味があるのでしょうか」

「……いや、普通は無茶なことは諦めるものなんだが……」

ステイナが爆笑からようやく落ち着いてきたのか、まだ肩を震わせながら言った。

「面白いでしょ、この子。この子と居たせいで私、何かクソジジイ共と相討ちするのが馬鹿らしくなっちゃったんですよ」

「そうか……確かに。私も今この瞬間は、国がどうだの元帥との云々だのは忘れていたかもしれない。それよりもっと切実な、明日の難所のが気になって気になってなあ」

イエルケルの冗談に、ステイナもアイリも大きく笑う。それは錯覚かもしれないが、イエルケルはこの時、騎士学校でも作ることが出来なかった友に出会えたと感じたのだった。

地面に横になると、やはり育ちの良い王族であるイエルケルは、咽る程の土と草の香りには慣れず眉をしかめる。隣を見てみると、ステイナもアイリも野宿には全く抵抗がないようで平然としたものである。女の子二人がそう出来ているのに、と思うとイエルケルは何やら恥ずかしくなってきた。自分もここで頑張つて寝ようと気合を入れる。そして、寝るという行為と気合を入れるという行為は全く相反するものだったと、改めて気付くのである。仕方なくイエルケルは、寝付けるようになるまで、少しものを考えることにした。

生まれて初めて与えられた騎士としての任務。それがまさかこんなことになるうとは。

行った先で三十人の騎士に囲まれ殺されそうになり、従者含め二十人近く居た中で、生き残ったのはたった三人。その三人のみで辺境領を突破しなければならなくなり、命懸けでラノメ山越えに挑む。途中、崖を登ったり、崖から落ちたり、色々あって今に至ると。

『……よく、生きてるよな。考えれば考える程生きてるのが不思議だ』

それもこれも、常識外れに頼もしい二人の騎士見習いの少女達のおかげだ。

イエルケルは国一番と言われている剣の使い手と面識があり剣を交えたこともあったが、その者と比べても二人の強さは常軌を逸している。

掛け値なしにこの世で一番強いのではないか、などとイエルケルには思えてしまう程だ。

密かにイエルケルは、自分こそが国一番の剣士と呼ばれるようになるつもりであったのだが、この二人が居ては流石に無理だ。

ただ、それを悔しいと思えない程に、二人は圧倒的だった。むしろ、目指す道程が考えていたよりずっと高くにまで続いていると知れたことが嬉しかった。

国に戻ったら二人には色々剣や鍛錬の方法を教えてもらおう、と考えると、是が非でも国に帰つてやろうという気になってきた。

そんな興奮するようなことばかり考えていたのだが、体は随分と疲労していたようで、イエルケルの意識は次第に薄れていき、家のベッドでそうすると変わるの深い眠りに落ちていくのであった。



石畳の道を荷馬車がひっきりなしに往来し、その脇を幾人もの人が、何がそんなに忙しいのか足早に歩いていく。

出店が禁止されている主道を少し外れると、そこには所狭しと露天商が店を広げ、食料品や生活雑貨から、胡散臭い魔法の品までが並べられている。

王都の賑わいは何時来ても変わらないもので。

ほんの十日も空けていただけなのに妙に懐かしい気がする。

イエルケル、ステイナ、アイリの三人は主道を王城に向かって進む。

街の奥に行くにつれ周辺の建物の造りがより高級なものへと変化していく。

こうなっていると徐々に往来も少なくなってくるが、それでもその建物、元帥府の周囲は相変わらず騒々しく、庶民ではなく貴族が集う故の独特な賑やかさがある。

「生きて、戻って来たなあ」

イエルケルの感慨深げな言葉にも、ステイナは特に感じることはないようだ。

「あの程度の雑兵相手では流石に殺られてはあげられませんよ」

まったくだ、と頷くアイリに、イエルケルは訂正と抗議を。

「いや、死ぬかと思ったのは辺境領ではなくラノメ山なんだが。お前等なあ、てっきり初日が一番キツいかと思ったら、二日目以降のがよっぽどひどかっただろーが。何だあの毒霧の谷は、この世の終わりの風景としか思えなかったぞアレ」

三人はイエルケルを先頭に残る二人が後ろに従う形で元帥府を訪れる。元帥府、大鷲騎士団の部屋を訪ねると、以前来た時と同じ配置に騎士団副団長が座っていたが、イエルケル達を見ると彼は、文字通り飛び上がって驚いた。

「で、ででで殿下!? イエルケル殿下ですか!」

「はい。任務の報告に参りました」

副団長は大いにうろたえた後、三人を応接室に通し、しばし待つよう言って退室した。

お茶の一杯も出されぬまま待たされ、副団長が戻って来た時は十人の騎士を引き連れていた。

「お待たせして申し訳ありません殿下。では、報告を聞きませう。他の騎士や従者達がおらぬことも含め、詳細をお願いしますぞ」

騎士達は半数が騎士団運営に携わっている重鎮達で、残る半数は特に腕が立つと言われている猛者達。彼等に囲まれ、尋問でもされるような刺々しい雰囲気の中、イエルケルは起こった出来事を報告する。

時折、騎士達の中から失笑が漏れるのは、三十人の騎士を三人で倒したただの、三人のみで容易くサルナーレ辺境領を突破したただの、ラノメ山中を抜けてきたただの話をした時だ。

イエルケルにも彼等の気持ちは理解出来る。腹の立つ話ではあるが、確かに信じられぬことばか

りなのだから。最後に副団長は念を押す。

「……殿下。確認いたしますが、本当にそれが報告でよろしいんですね？ これは元帥はもちろんのこと、宰相閣下にも上がる報告なのですよ。今ならまだ訂正も出来ますが」

嘘つくんならもつとマシなものにしろ、と暗に言っている。

それでも他に言いようのないイエルケルは、極力誠実に見えるような顔で返事をする。

「ご配慮ありがとうございます。ですが、私からの報告は以上です」

「そうですね。では後日、恐らくもつと大きな形で事情を聞くことになると思いますのでそのつもりで」

三人が退室すると、すぐに部屋の中から笑い声が聞こえてくる。

イエルケルはステイナとアイリを伴ったまま元帥府を出る。

「二人共、この後用事はあるか？ 特にないのなら私の屋敷に来ないか？ 無事帰還の祝いをしたと思うのだが」

ステイナは、イエルケルが初めて見る、張り付けたような笑顔をしていた。

「殿下。あのクソ共を全員闇討ちしたとして、バレない方法って何かありませんか？」

「おーい、いきなり何言い出すんだー」

アイリも無理やり無表情を作ろうとして失敗し、頬がひくつき額に青筋が二つも三つも走っている。

「殿下。元帥府には今何人が詰めておりましたでしょうか。全部殺せば、足はつかないと思うので。」

「そういう不穏な台詞はせめて私の屋敷に着いてからにしてくれっ！ と、とにかく一度このまま屋敷に行くからな、いいな」

むすーとした顔の二人を引きつれ、イエルケルは自分の屋敷へ向かう。

元帥府を出た所で、息を切らして駆けて来る者がいた。

「ヘルゲ、か」

イエルケルは心底から面倒そうに顔を歪めるが、仲間二人を引き連れ走ってきた青年貴族、ヘルゲはイエルケルを見るなり驚きに目を見開く。

「お、おま、お前……生きて戻ってきた？ いやいやいやいや、ありえねえだろ。おいイエルケル

お前、一体何やらかした」

「残念だったな、あの程度で俺が殺せるものかよ」

「ばっ、お前っ、あの程度って……ああ、そうか。そうだよ、わかったぞ。お前、辺境領行かなかったんだろ。くっそ、なんて勘の良い奴だ。けどそれだとお前、任務を放棄したってことに……」

そこでヘルゲが言葉を止めたのは、イエルケルの後ろに控える二人の女騎士の怒りの気配に気付いたからだ。

イエルケルの側に控える女騎士見習い風情が、怒気を発しているのが見えたところでヘルゲが怯えてやらねばならぬ理由はない。やる気か、とヘルゲは二人を睨み返す。

ヘルゲにはこの二人の尋常ならざる戦士の気配は感じ取れなかったようだ。

もっとも、初対面時のイエルケルもはっきりとそれを自覚出来たわけでもないのに、ヘルゲのこの反応にもイエルケルは苦笑するのみだが。

イエルケルはヘルゲの方を向いたまま後ろの二人に言う。

「ヘルゲが抜くまで動くなよ。もちろんその時でも、お前達の相手はお付きの二人だ」

イエルケルの声に、ヘルゲのお付きの騎士二人が緊張に身を硬くする。この二人はヘルゲ付きであり何度もイエルケルと顔を合わせているので、イエルケルの尋常ではない剣捌きをよく見知っている。

後ろからの澁んだ気配がより濃くなった。ステイナとアイリは、待て、ではなく、斬ってよいと受け取った模様。さっさと抜けと、言葉ではなく殺意で言っている。

とはいえ、ヘルゲはお付きの騎士との三人がかりでもイエルケルには絶対に勝てないとわかってるだろうし、抜くことはまずないと知っていて言った言葉でもあるのだが。

案の定ヘルゲは不愉快そうに顔を歪めるも、剣に手をつけようとはしない。

「チツ、おいイエルケル、これだけは覚えとけよ」

そう言つて身を翻すヘルゲ。

「完璧に、おじい様を敵に回したぞ、お前。つまり、お前は俺の敵だってことだ」

「ふん、今更何言ってる。お前はずっと、騎士学校の頃から俺の敵だったろう」

「……そうだな。せいぜい、寝首をかかれぬよう気をつけるこつた」

ヘルゲはステイナとアイリの二人に向かって、長生きしたきゃさっさとそんなの見捨てて逃げ出すんだな、と言い残し去って行った。

イエルケルの屋敷は王族のそれとは到底思えぬような小さなもので、ステイナやアイリの持つ一般的な貴族の邸宅と比べても半分程の大きさしかない。それでも使用人の心がけが行き届いているのか屋敷は清潔で庭は整っており、ステイナとアイリが案内された食堂も、採光や飾られた花などのおかげで小洒落た部屋に仕上がっている。

二人の機嫌は直らぬまま。イエルケルは席につくと苦笑する。

「二人共、あの手の嫌がらせは経験がないか？」

ステイナ、アイリも素直に席につくが、仏頂面はやはり崩れず。アイリがわかりやすく怒りを顕わにする。

「少なくとも私は。まったく、人の武勲を何だと思っておるか」

ステイナはそっぽを向いたまま。

「……ありますけど。不愉快なものには不愉快なんです」

ステイナの失礼な態度も、慣れてくれたからこそと思うと、むしろ嬉しく思えてくるイエルケルである。

「私は騎士学校ですつとそうだったからな、今更怒る気にもなれんよ」

イエルケルの言葉に、アイリは不思議そうな顔をした。

「気になっていたのですが、イエルケル殿下は、その、あまり王族という立場を尊いものと思っておられぬようにお見受けするのですが……」

「実際大したことはないよ。王子の数だけでも十人以上居るんだ、有り難みも何もあつたもんじゃない」

それはステイナも気になっていたのか彼女も参加してくる。

「とはいえ王族は王族ですわ。普通の貴族からすれば、経済力云々がどうあろうと恐れ敬う部分はあると思います」

「そうかあああああああ？」

イエルケルらしからぬ顔が歪む程に不満げな表情。よほどステイナの言葉が信じられぬらしい。ステイナは真顔で訊ねる。

「一体、騎士学校で何があつたんです？ あそこはそれなりに高位の貴族子弟でないと入れないですよね」

今度はイエルケルがそっぽを向く番であつた。

「私は学校に入る前から、学校で優れた成績を残せねば王族の面目が立たぬと思い、ずっと訓練を行っていたのだ。なのに学校に入って周りの奴等^{やつら}はどうかと思えば、ロクに走ることも出来ずあまつさえ、重い剣は腕が疲れるなんて寝言を抜かす馬鹿^{ばか}まで居るんだぞ。入学から一週間で私が味わつた絶望がどれほどのものだったか」

アイリはイエルケルとその辺りの感性が一緒なのか、同じように憤慨する。

「何と。信じられませんな、仮にもカレリア王国の未来を担う騎士見習い達がそのような体たらくとは」

ステイナは現実とはそんなものと見切っていたので、いちいち腹を立てることもなかった。

「それで、殿下はそいつ等に言つたんですか？ 怠けるなって」

「馬鹿を言うな。私にだって最低限の社交性くらい備わっている。私の不満が態度に出してしまわないよう苦労したものだ」

「それじゃ、もしかして入学当時から剣の技術とかは一番でした？」

「もちろんだ。競う相手すら居なかつたので、私は目標を教官達に変えたぐらいだ」

「……嫉妬^{しと}も、あつたんでしようね」

「私もいつそ手を抜くなんて真似が出来れば良かったんだが、どうしても、な。カレリアの将来を担う騎士学校で手を抜かねばならぬという事実^{じじつ}に、納得が出来ぬままずっと卒業まで行つてしまったのだ」

ステイナがイエルケルの拘りを切つて捨てる。

「そういうところが疎ましく思われたんじゃないですか？ 俺はお前等とは違うなんて顔されたら、そりゃ誰だって愉快ではないでしょうに。しかもその相手は誰より優秀なんでしょう？ 殺意が生じていても不思議はありませんね」

「……見てきたように言うな」

「まさか、推測しただけですよ。ただ一つだけ言えることは、実は私も入学希望してたんですが入れなくてほんっつつとに良かったなと」

イエルケルが文句を言おうとしたところで、使用人達が食事と酒を運んで来てくれた。

食事内容は豪華なものではなかったが、使用人達が相当気合いを入れたということは伝わってきた。これらを口にしワインを楽しみながら、歓談は続く。とはいえ貴族の歓談というよりは、最早庶民が酒場で騒いでいるのと大差ない状態であったが。

アイリはワインを一息にあおった後、勢い込んで話し出す。

「ですからっ！ 殿下は王族の一員なのですし、此度の手柄をもって騎士団でも作ってしまえばよろしい！ 騎士団は軍とは独立した組織ですから、元帥が何を言おうと最早恐れることはありませんぬ！」

「そう簡単に行くかつ！ 騎士団を作ったとて兵を集める金も維持する金もないのだぞ！」

「そんなものさっさと何処ぞに出兵して再び手柄を立てればいいでしょう！ おお、ちょうど境界領も叛いたことですし討伐に名乗りを上げれば良いではありませんか！」

「成り立て騎士にそんな重要任務与えてくれるわけないだろうが！ あと私は兵の募り方など知らん！」

賑やかに怒鳴りあうイエルケルとアイリを眺めながらワインを飲むステイナに、使用人がおかわりを注ぐ。その使用人の表情が本当に嬉しそうなを見てステイナは彼に問う。

「あの二人の怒鳴りあいがあるに楽しい？」

「いえ。殿下があのように夢中になって大声を出されるなど、ご幼少の頃以来です！」

「色々と苦労してるみたいね、殿下も。領地の経営、そんなに上手く行ってないの？」

「私の口から申し上げられることではありませんが……殿下の騎士としての給金が頼みの綱でございます！」

年や立場に似合わぬ落ち着いた様子は苦労故なのだろうか、とステイナは少ししんみりとしてしまったが、気を取り直して怒鳴りあいに参加することにした。

「殿下、もしお金がないのが問題なら、私が国内の盗賊団の所在調べてきますから、そいつら退治して資金集めましょうよ」

「とーぞくの上前跳ねるとかお前それ盗賊よりタチ悪いだろうがっ！」

「別に退治しないとは言ってますよ。きちんと皆殺して国内治安の健全化に一役買いますよ。ただ、盗賊が貯め込んだ資金を過少に報告するだけですっ」

「王族が率先して不正を行ってどーする！ ……それはそれとしてステイナ。盗賊の所在、調べられるのか？」

「有名どころでしたら。基本的に連中、軍隊動くとなるとゴキブリみたいにさっさと逃げ出しちゃいますけど、少数で乗り込むなら捕らえることは可能ですわよ」

「うーむ。ああ、いや、資金奪うとかではなく、普通に退治しても報奨金やら地元からの援助やらが期待出来るからな。しかし、少数前提か……」

「どうせ敵は五十もいないんですから私達三人だけで充分でしょう」

イエルクエルは、そこで言葉が止まる。

考え込んで、それで、遂に耐え切れずこれまで我慢してきた言葉を口にする。

「なあ、ステイナ、アイリ。お前達、私の騎士になるつもりはないか？」

そう言われたステイナとアイリは、目を大きく見開いてイエルクエルを見返す。

すぐに返事はない。イエルクエルは言い訳したくなるのを懸命に堪え、二人をまっすぐ見つめる。

こんな席で、こんな場所で、こんな時に口にしてしまった言葉であるが、せめてそれがイエルクールの真意であることだけは伝わってもらわねばと。

ステイナは探るような目を向ける。

「……本気、ですか？」

「ああ。お前達の事情もわかった。その上で、私の元に来て欲しいと思っている」

そんなやりとりを交わした二人は、すすり泣く声が聞こえ驚いてそちらを見ると、何とアイリが目を擦りながら泣き出しているではないか。

大慌てのイエルクエル。

「ど、どうしたアイリ。な、何かとんでもない失礼でもあったか？」

泣きながらぶんぶん首を横に振るアイリ。

「い、いえ……その、殿下。ひとつ、私の浅ましい話を聞いて下さい」

「う、うむ」

「私達が騎士見習いから騎士になるのは、とても難しいことでしょう。たとえ手柄を立てたとして

も、やはり騎士として貴族に復権するのは難しいと思っております。ですから、こうして殿下のお屋敷に招かれた時、期待を、してしまっていたのです。もしかしたら殿下は、私達を自身の騎士にと行って下さるのではと」

私達、と言われているステイナは口を挟まず。

「殿下はご自身が王族であることを卑下なさいます。しかし、王族である殿下には私達を騎士として、貴族に戻す力がおありなのです。だからこそ、私は殿下が自らを低く見られていることが嫌だったのです」

イエルクエルもまた無言のまま。

「結局のところ、私は殿下のためのようなフリをしながら、^{全て}は自分のためにそうしていたというだけだったのです。そんな私を、殿下は全ての事情を知った上で本当に騎士にして下さるといもう、私は自分が恥ずかしいやら、情けないやら……」

まだ少しぐずっているアイリに、イエルクエルは優しく問いかける。

「わかった。で、どうだアイリ。君は、私の騎士になってくれるか？」

勢いよく顔を上げ席から立ち上がるアイリ。

「よ、喜んで！」

一つ大きく頷いた後、今度はステイナの方に向き直る。

「ステイナ、君はどうだい。私の騎士になってくれないか」

ステイナもまた優しく微笑み返す。

「ええ、もちろん。喜んでお受けさせていただきますわ」

「そうか。ありがとう、二人共」

騎士の叙任には様々な作法があり、略式ならばここで今二人にそうすることも出来た。

だが三人共が、いずれ後で儀式は行うにしても、今そうする気にはなれなかった。

騎士の誓約と誇りと、といったものではなく、もっと何か暖かいもので結ばれたいと、三人共が思っていたのだから。

「あの状況からイエルケルと女の騎士見習いが二人共生還しただと」

宰相アンセルミは最初に驚き、すぐに見るからに機嫌が良くなる。

「ははっ、これは良い話を聞いた。昨今稀に見る素晴らしい話じゃないか」

彼がどんな勘違いをしているのか、補佐官ヴァリオは正確に把握していた。

「宰相閣下。あまり先入観を持たれるのはよろしくないかと」

「ん？ 五人の騎士が命を賭して王子と女性を守り抜いたという話ではないのか？」

ヴァリオは無言でイエルケルから上がってきた状況報告書を提出する。

そこには、五人の騎士の活躍など欠片も書かれておらず、数多の障害を全て生き残った三人のみで突破してきたと書かれている。子供が見ても無理だとわかる話まで書かれてあり、上機嫌だったアンセルミの表情が強張っていく。

「……私はイエルケルと直接話をしたことはないが、コイツは一体どういう奴なんだ？」

「先入観は捨てて下さい。関わった全ての人物が外道である可能性もあるのですから」

「可能性、なのか？ お前がまだ調べてないとは考え難いが」

「五人の騎士、二人の女騎士見習い、イエルケル殿下、全て評判は最悪です。五人の騎士は元帥なし彼の側近が選んだだけあって、居るだけで害悪な者達ばかりですわ」

「……感心すべき部分はない、と？」

無視して続けるヴァリオ。

「二人の騎士見習いは、先の内戦で家を取り潰された者達です。人品は不明ですが、とりあえず敵は多いようですな。何処の報告書にも好意的な評価は一つありません」

「それでよく見習いになれたな」

「そして最後のイエルケル殿下ですが、騎士学校での評判は最低ですな。こちらもただの一人も擁護する者はおりません。ただ……」

「ん？」

「ダレンス様が、擁護はしておりませんが評価はしております。数年の内にカレリア最強の剣士となるであろう、と。彼による人物評価の欄には何も書かれておりませんでした」

「ふむ……直接会ってみるしかないか。時間の調整は出来そうか？」

「無理です」

「おいっ！」

「殿下の処遇に関して元帥が強硬に主張してきております。生きて帰ってきたことが余程腹に据えかねたようで」

「いや、逆恨みもいいところだろそれ」

「それはあまり重要なことではありません」

イエルケルは元帥府の会議室へと呼び出される。

呼び出したのは大鷲騎士団副団長で、他にも数人ずつ武官と文官が揃っていた。武官は幾人か顔を見たことがあるが、文官は全くイエルケルにはわからない。だが、いずれも地位の高い者であることは見ればわかる。

まず真つ先に副団長が口を開く。この場は彼の仕切りのようだ。

「イエルケル殿下、先日の視察の件はまことにご苦勞様でした。やつめ、カレリアに弓引くなどとこれまで王国から受けた恩顧を何と心得るか」

白々しいのを承知でイエルケルもこたえる。

「はい。五人の騎士達には残念なことをしました」

副団長はイエルケルの返事に口の端を上げる。

「ええ、ええ、ごもっともです。しかし殿下、殿下はなりたてとはいえ騎士であり、部下を持った以上責任が生じるものなのです。残念でしたでは済まされませぬぞ」

イエルケルは無言。

「まあそこは我々大鷲騎士団の方で遺族への手当てもしておきました。ただ、ですな。仮にも殿下をお守りして亡くなったということですから、生じる手当てもかなりの額になりました。もし殿下がお亡くなりになっていたのなら、何故殿下をお守り出来なかったと責められる立場であったでしょうから、そうしたことはならなかったのですが」

やはりイエルケルは無言。所謂嫌味や嫌がらせや理不尽な主張は流すのが基本である。

「本来せねばならぬ殿下の代わりに、我々大鷲騎士団が様々な処理を行い、出費を強いられたこと、覚えておいて下さいませ」

深く頭を下げるイエルケル。

「ご配慮、感謝いたします」

「いえいえいえいえ、で、その代わりという話ではもちろんありませんが、殿下には新たな名譽ある任務のお話がございます」

懲罰ではなかったか、とイエルケルが少しほっとしたのは、自分が罰を下されないことよりも、理不尽に罰を下すことが出来ないこの国の体制に安堵したものだ。

「失われた五人の騎士、彼等の思いに報いるためにも、サルナーレ辺境領への侵攻が決定しました。つきましては殿下にも従軍していただきたく」

何だそんなことかと思ってしまうたイエルケルの不覚である。

「更に、此度の失われた五人の騎士に対し、最も責任のある立場の殿下が率先して戦いに赴くべき

だと元帥府内から意見が出ましても、殿下には一軍を率いていただくかと思っております」
驚きに目を丸くするイエルケル。

「わ、私が一軍を、ですか。しかし、私には率いる兵なぞおりませんが、その、お恥ずかしい話ですが、兵を集めることも出来ませぬ」

「おや？ それはおかしい。殿下は立派なご領地をお持ちではありませんか」

「若い男手をいくらかき集めたところで二十人にもなりませんし、軍役を課すのならば必ず発生する給金の用意もありません」

嘆息し隣の武官と顔を見合わせる副団長。二人は揃ってイエルケルを横目に見ながらさせせら笑っている。

「それで領主の義務を果たしていると言えるのですかな。いえ、失礼。ならば仕方ありません。兵の方は我々が手配いたしましたでしょう。三十人の騎士を蹴散らし、ラノメ山を突破する程の武勇を誇る殿下です。恐れるものなぞ何もないでしょう」

有無を言わさぬ口調で副団長は締める。

「よろしいですか？」

イエルケルは、騎士学校で悪意を向けられることに慣れていて良かった、と心底から思った。このまま副団長の望む形で領くのは、絶対にやってはならないことだ。

たとえ相手の意に反することがはっきりとわかっていても、言わねばならない場面はある。それがどんな場面なのかを、騎士学校での何度もの失敗で学んでいた。

「派遣される軍の内情をお聞かせ願いたい。私はどなたの指揮下に入るのですか？」

決め台詞まで持っていたのに言い返されたことで、副団長の表情が険悪になる。

「は？ ああ、軍ですね。殿下が知ったところで意味はないと思いますが。ええと、殿下は元帥府直轄軍の一部ということになりますので、詳しくはそちらに聞いて下さい」

「では兵はどれほどに？ 元帥府の兵を指揮する形になるのでしょうか」

「馬鹿な！」

勢いよく机を叩く副団長。

「栄光あるカレリア国軍をなりたて騎士が指揮しようなどと不遜にも程がありますぞ！」

怒声にも、内心はともかく表面上は動じぬイエルケル。

「元帥府、つまり国軍の一部でありながら、大鷲騎士団から手配していただく兵を指揮するのですか？」

「一々細かなことを！ そんなに従軍がお嫌か!? 軍を指揮する自信がないのであれば！ そのような臆病者に兵を預けるなど出来ませぬぞ！」

恐縮したような顔だけして見せるイエルケル。

「そうですか。私に臆したつもりはありませんでしたが、そう受け取られたのであれば仕方ありません。では私は個人で従軍する形でよろしいでしょうか」

イエルケルが叱責に応えるようにして引き下がると、急に焦り出す副団長。

「い、いや、殿下が臆病風に吹かれたわけではないのな、急い出さず副団長

にすることも出来ませぬし、指揮の方、よろしく願いますぞ」

「どうやら副団長はイエルケルが軍の指揮を引き受けねば都合が悪いようだ。」

「そうおっしゃって下さるのならありがたい。で、兵はどういった……」

「傭兵です！ 数多の戦場を渡り歩いた猛者達ですぞ！」

「数は？」

「五百です！ それ以上は流石に殿下には荷が重すぎますからな！」

「ありがとうございます。謹んでお受けさせていただきますしよ」

その言葉と共に、激怒していた副団長の表情がにやけ笑いの嫌らしいものへと変化する。

「そうですか！ お受けいただけますか！ ははっ！ ならば早速ですが預かっていた任務をお伝えします！ 殿下は傭兵軍を率い先発隊として辺境領に赴き！ 国軍の武威を示していただきます！」

不明瞭な言葉が多すぎて、イエルケルもすぐに問い返すことが出来ない。

「確かに伝えましたぞ！ では、今日はこれまでで！ 傭兵部隊の引渡しは十日後にも行えますので、それが済み次第すぐにでも出立して下さい！」

副団長は席を立ち、他の武官文官にも退室を促す。しかしイエルケルは、それで話を終わらせられてはたまったものではない。

「お待ち下さい。まだ敵軍の情報や後発隊との連携、糧食の補給のことも聞いておりませんし、そもそも武威を示せとは……」

鬱陶しそうに一度だけ振り返ってやる副団長。

「我等も暇ではないのです。それらの件は追って連絡しますので」

逃げるように部屋を出る副団長。武官達はイエルケルを嘲笑しながら、文官達は冷たい視線をイエルケルと副団長双方に向けながら、退室していく。

彼等の悪意に満ちた態度からイエルケルは察する。こいつらはまだイエルケルを殺すことを諦めていないのだと。

王族であるイエルケルには、騎士を任命する権利が与えられている。これは古くからある慣習の一つで、悪用する馬鹿でもいれば法整備の機会もあったのだろうが、無制限に騎士を任じられるわけでもないため、これまで特に問題視もされず認められてきたのである。

王族の者が城の担当官に申請をあげ、これが認められれば晴れて騎士の位を与えることが出来る。ここであまりに馬鹿げた叙任は国側が却下できるのがこれまでこの慣習が認められてきた大きな理由である。

イエルケルはステイナとアイリの騎士申請をあげるために城へと出向いたが、ここで少々小細工を弄する。ステイナとアイリを狙っている貴族、バルトサール侯爵とケネト子爵と一切繋がらぬ担当官がいる時を狙って申請を上げるのだ。

王族を通す騎士叙任は彼等の想定外だったのか、騎士の申請はすんなり通ってくれた。

だが上手く行ったのは騎士叙任の件のみで、後は指揮権が何処にあるかの確認や、補給計画や、後続との連携や、与えられた任務の具体的な目標等、当然知っていなければならぬことは全部居留守やらたらいまわしやらを使われ、何処に行っても確認出来ず。

無為に時間だけが過ぎていく。

イエルケルは元帥府と王宮へ何度も通い、少しでも話が聞けそうな所を探して回り、アイリは補給の確保、ステイナは何やら怪しげな場所に情報収集に向かう。

毎夜それぞれの進捗を確かめ合うのだが、イエルケルの方は全く進展がなく、アイリもかなり苦労しているようだ。しかし、ステイナは一人順調に情報を集めてくる。

「敵、ほぼ確定数字出ました。辺境領城の守備兵抜きで三千ですわね」

イエルケルの屋敷で夕食を共にしながらの発言で、思わず口に含んだたまねぎを嘔き出しそうになるイエルケル。

「さ、さんぜんだと!? 待て。まてまて。命令は私達にこれを攻撃せよという内容ではなかったか?」

「まともにぶつかつたらどうなるんでしようね」

「私にもわからん。そもそも私は今回が初陣だぞ」

「奇遇ですわ殿下、私もです」

アイリもパンにチーズを乗せながら続く。

「そういえば私も正式な形での戦は初めてであったか。うーむ、実は我々、物凄く不利なのはあ

りませんか?」

イエルケルは二人をちらつと見る。

「二人は軍学は修めているか?」

「一応は」

「王都で閲覧可能な書は全て目を通しましたぞ」

よしつ、とイエルケルは手にしたパンを半分にか切る。

「明日、蔵書館へ地図を書き写しに行くぞ。それを元に策を考え、後は傭兵達の長と相談しよう。その者なら戦にも慣れていようし、良し悪しの判断も出来ようからな」

ステイナは持って来ていた大きな鞆かばんの中にあつた書類を取り出す。

「地図ならありますよ。とりあえず平民の間で出回つてると、軍用のと、徴税用と。騎士位持ちつていいですわねえ、皆騎士を名乗るだけで下手な貴族が頼むより余程協力的になつてくれますわ」

「よくやったステイナ! では食事が終わったら検討けんとうするでしょう」

ああ、あともう一つ、とステイナは思い出したように付け加える。

「バルトサール侯爵とケネト子爵が激怒しているそうですわ。明日あたり殿下に呼び出しがかかるのではないでしょうか」

うんざりした顔で千切ったパンを頬張ほおぼるイエルケル。

「……私も連中みたいに居留守を使うわけにはいかんだろうか……」

「屋敷に籠もっているのならそれもアリでしょうが、出歩かないわけにはいきませんから。私達のことでお手数おかけします」

アイリは五つ目のパンにチーズを乗せている。

「補給も随分とヒドイものですな。辺境領の領民からもらえばいい、なんて真顔で言う馬鹿も居るくらいですから。嫌がらせにしても言って良いことと悪いことがあるでしょうに」

イエルケルは何ともいえない顔をする。

「私も同じことを言われた。案外連中本気でそう思っているのかもな……嫌だ嫌だ。元帥府は良い顔はしないだろうが、補給の備えはあそこの仕事で我々はこれを受け取る権利がある。何を言っても来ようと強く出て構わないぞアイリ」

「はっ、ならば遠慮なくそうさせていただきますしょう」

使用人が持つて来たデザートを平らげると、食器やらを片付けさせ、そのまま食堂で作戦談義に入る。アイリは練りに練ったらしい作戦を披露する。

「ここはやはり私が一騎駆けにて敵前衛を粉碎してみせますのでその際に……」

「矢を雨と射掛けられたらそれで終わりだろう！ 一人の武勇は既に向こうに知れているのだから、絶対に油断はしてくれんぞ！」

真顔でかつ妙案のつもりで、ステイナは以下の提案を述べる。

「いっそ三人で辺境領の城に忍び込むというのはどうでしょう。軍が出陣した後ということでしたら口くちなし相手も残っていないでしょうし、首狩り放題ですよ」

「首狩りって未開の部族か私達は!? 討つべきは辺境領の軍であって辺境領ではないのだから、そういう無差別弱点狙いみたいなのはなしだなっ！」

二人の発想は軍学を学んだとは到底思えない、騎士学校ならば教官激怒の上に零点つけられそうなものばかりであるが、そもそもまともな作戦でどうこう出来る戦力差ではない。

「待ち伏せです殿下、他に手はありません。有利な地形で山程罨張って待ち構えましょう。それに視界の通らぬ狭い場所ならば、私が突っ込んでみても矢での迎撃は難しいでしょうし」

「武威を示せということなのだから、待ち構えるわけにはいかんだろう。あと単騎突貫は絶対やらせんからその発想から離れろ」

イエルケルの反論に、無言のまま口を尖らせて抗議するアイリはスルー。

「騎馬だけでひたすら馬の上から矢を打って逃げ回るとか」

「敵にも騎馬は居るだろう。それに傭兵は基本歩兵だそうだし、馬を与えたところで上手く扱えるとは思えん」

こちらも拗ねた顔で地図に目を落とすステイナ。

イエルケルは状況を丁寧にとめてみた。

「ともかく一戦はする。しなければならん。だが、その上で如何に損害を抑えつつ、引き上げられるかだ。勝つだとか損害を与えるだとか余計なことは一切考えず、ただ少しでも損害を少なくすることだけを考えよう」

即座にアイリ、ステイナから反論とか文句とかが。

「殿下！ そのような消極的な考えでどうしますか！ ここで手柄を立てねばこれから先、二度と機会なぞ回って来ませぬぞ！」

実に反論しづらい言葉だ。基本脳筋のアイリであるが、時々には正論を吐くらしい。ステイナもさっきの仕返しとばかりに言い返しにかかる。

「率いるは傭兵です。殿下の弱気を見れば、まともに動いてくれなくなる恐れがありますよ。六倍もの敵に立ち向かう理由が『一度は矛を交えるのが命令だから』なんてどうやって彼等に納得してもらうつもりですか」

そうは言うがな、と腕を組むイエルケル。

そこからはもう酒の席の無礼講と一緒の騒ぎだ。あれが良い、これがよろしくない、だのと始まり、三人の相談は夜遅くまで続いた。

バルトサール侯爵とケネト子爵の二人に呼び出されたイエルケルは、忙しい最中わざわざバルトサール侯爵の屋敷にまで出向くことになった。

ステイナとアイリを側室にしようと同様な画策をしていた二人だ、イエルケルもまるで好意的にない相手だが、感情的にならず冷静に対処しなければならぬ。今や二人を守るのはイエルケルの役目なのだから。

相手は老練な貴族だ、どんな手に出てきてもおかしくはない。イエルケルは、どのような企みも

必ず看破してみせる、と気合いを入れ会談に臨む。

「きつさまは一体何を考えておるのだ！ あれは反逆者の娘だぞ！ それを！ 騎士に迎えるなど何たる考えなし！ 何たる愚かさか！ そのような真似をすれば貴様も謀反を疑われると何故考えが及ばぬ！」

「下の方の王子達はどれもこれも愚物ばかりと聞いていましたが、いやはや聞きしに勝りますな。今なら宰相閣下のご苦労が我がことのように理解出来ます。こんな後にも先も考えられぬ行動に出るとは、なるほど間引きしたくもなるでしょうに」

「はっ！ あの女共にたぶらかされおったか！ 軽薄な顔をしておって！ どうせ女の喜ばせ方も口々に知らんのだろう！ 女を騙だましているつもりで女に騙され身を持ち崩していく様が目に見えるようじゃー！」

「私が若い頃にも愚か者は居ましたが、最近の若いのは最早理解不能です。思慮がない、分別がない、思想がない、挙げ句色にだけは人一倍熱心とは、もはや国にとっては害悪以外の何者でもありません」

呆あっけ気に取られるイエルケル。謀略を巡らせ、言葉による戦を想像していたのだが、まさか感情むき出しで延々罵られることになるとは思ってもみなかった。

怒鳴り萎縮じじくさせた後に致命的な言葉を滑り込ませるつもりか、としばらく黙って聞いていたが、二人はひたすら思いつく限りの罵詈雑言をイエルケルに浴びせるのみで、一切の仕掛けもしてはこない。結局二人が疲れ果てるまで罵り言葉は続き、荒い息を漏らしながらバルトサール侯爵が最

後に締める。

「では今日中にも二人の騎士申請を取り下げてくださいのだ！ わかったな！」
おちよくるように即答してやりたかったがぐっと堪え、間を開けてから丁寧に戻事をするイエルケル。

「申し訳ありませんがそれは出来ません。既に申請は宰相閣下の認可を得てしまっておりまして、宰相閣下のお顔を潰すような真似は流石に」

イエルケルは騎士学校時代、感情的に他人を詰る人間を何度も相手してきた。

そうした時、冷静で的確な指摘をしたところで意味はない。何を言ったところで、彼らはそれが正しい正しくないに関係なく大声で怒鳴り自分の正当性を主張するだけなのだから。

彼らの言葉に同意を示さぬと再び爆発するもののだが、どうやらバルトサール侯爵もケネト子爵もそれまで怒鳴り続けていたことで疲れ果てそう出来ないようだ。

ただ顔を白黒赤青させながら、意味のわからない身振り手振りをするのみ。

「お二方のお話、肝に銘じておきます。では今日はこの辺りで失礼いたします」

バルトサール侯爵の屋敷を出た後、イエルケルは考える。今回の会談、二人はまるつきり馬鹿丸出しであった。しかしそれはイエルケルを年若いと侮り、怒鳴り脅すだけで解決すると考えていたからではないかと。

問題は次に二人が打ってくる手だ。長い貴族人生を生き抜いてきた二人の得意分野での攻撃が来ると予想される。せめても出陣するまではそうならぬよう、まだイエルケルを説得する余地がある、と二人に思わせるようにしてきたつもりであった。
「やはり難しいな、剣振ってる方が余程私の性にあってる」
騎士学校での人間関係は、この先の貴族人生の縮図である、とはとある教官の言葉であったが、まったくもってその通りであった。
ただ、全く同じだと勘違いするときはと手痛い傷を負うだろう、とも。

アイリの尽力によりようやく補給の手配がいたので、イエルケルは用意させた傭兵達用の駐屯場所にこれを運ばせる。

彼等は遠く国境地帯から王都側まで来るといので、イエルケルは一晩だけでも彼らを労えるよう、落ち着ける駐屯場所と暖かい食事と酒の準備をする。

料理の準備はイエルケル、アイリ、ステイナ三人の家の使用人が行う。流石に使用人達を荒くれ傭兵と関わらせるのは申し訳ないので、給仕は自分達でやってもらうことにしたが。

この準備に一番手間を割き、気を配ったのはアイリであった。

他所の家の使用人でも当然の顔をして指示し、補給品を運んできた元帥府の人間まで使って事前にアイリが決めた通り、僅かな場所のズレもなく正確に物資を置かせる。

補給品は細部に至るまで数を確認し、一つでもズレがあればすぐに対応させる。物資を運んできた人間がうんざりする程細かく確認し、もう逆らう気もなくなるぐらいへばったところで駐屯場所

用意を手伝わせるのである。夕方頃ひるまになってアイリの仕事ぶりを見に来たイエルケルは、一緒に来たステイナに小声で訊ねる。

「もしかしてアイリ、段取り組むのとか得意か？」

「部下をこきつかうのも得意ですわよ。あの子の所の使用人、本当に大変そうですもの」

この場所は傭兵達が来るまで、昼間は使用人を置いておけばいいが、夜は少し物騒なのでアイリが一人で見張りに立つつもりであった。

アイリの家の使用人は、一度だけアイリに自分達が夜番を代わると言うが、アイリが断るとそれ以上は何も言わず屋敷に戻って行った。

「……よく教育されてるな」

「あれは調教って言うんですわ」

二人に気付いたアイリが手を振っている。

「おお、二人共。どうされましたか？」

イエルケルとステイナはアイリの方に向け、荷物を掲げて見せる。

イエルケルは両手に一杯の弁当を、ステイナは同じく両手一杯に資料やら地図やらを。

「今日はこっちで寝ると聞いてな。私達も付き合おうかと思っただ」

「アンタ居ないと作戦の話が進まないのよ。殿下も野営平気だったさ」

「ばあつ、といった擬音が聞こえる程、アイリの顔が歓喜に花開く。

「わ、わざわざこんな所まで、二人共仕方がないのう。私がおらんと駄目なのだから」

ステイナはアイリの側まで行くと、荷物を地面に投げ捨てつつアイリの脇を肘でつつく。

「嬉しいくせに、正直にそう言いなさいよっ」

「そ、そんなことだ、ただだれも言っておらんしっ！」

「素直じゃないわねえ、そういう所可愛くないわよー。私が可愛くなるようにしたげるから、そこで服脱いで横になりなさい」

「なああああにを言い出すんだ貴様はああああああ！」

二人で揉み合もみあいを始めるのを、イエルケルは混ざり難そうにしながらそっぽを向く。

「明日も晴れるかなー」

後ろからアイリの悲鳴が聞こえる。

「で、殿下あああああ！ お、おーたーすーけー！」

「馬鹿めっ！ 殿下に今のアンタの姿を正視する度胸はないっ！」

彼方を向いて空を見上げたままのイエルケル。

「ステイナ、それ正解。ああ、もう星が見える時間だな。火でも起こしてくるか」

「でんかあああああああああ！」

とりあえず、最終的にアイリの純潔だけは守られたそうなの。

傭兵を迎える日。

この日に至るまで、イエルケルは元帥府から聞くべきことを聞けなかった。敵数も、後続軍の規模と出陣時期も、敵の援軍予定や糧食の量等敵情報も、今後の補給計画も、三人が走り回って得たものであって、元帥府は最後まで一切の情報提供をしなかった。

致命的なのは命令内容の確認が出来なかったこと。『先発隊としてサルナーレ辺境領に赴き、カレリア王軍の武威を示せ』という曖昧な命令で、六倍の敵と当たらねばならなかった。

既に三人の間では、曖昧な命令であることを盾に、積極的すぎる交戦は避けようという話で落ち着いていた。

丘の向こうから、金属の輝きが見えてきた。日の光を浴び、身につけた鎧や槍が鈍く照り返される。その数五百。稜線に沿って波打つように行軍してくる彼等を、イエルケル達三人は駐屯場所にて出迎える。騎馬はなし。皆が槍を手にしており、ほぼ全員人相が最悪だ。イエルケルの前で先頭に立つ男が行軍の停止を命じる。

「バツ 傭兵団団長、アンスガルつす」

イエルケルの整った上品な風貌は、一目で相手に貴族と伝わるからこういう時は楽だ。

「カレリア王国第十五王子、騎士イエルケルだ。こちらは同じく騎士アイリ・フォルシウスと騎士ステイナ・アルムグレン。よろしく頼む」

二人の女騎士を見た傭兵達の目の色が変わるが、少なくともアンスガルはそれを表に出すような真似はしなかった。

「王子様の下で戦うってな初めてでして、何か失礼があるかもしれやせんが、どうか堪忍してやっ

てくださいえ」

「いや、こちらこそ色々学ばせてもらおうと思っっている。そちらに食事と酒の用意があるので、天幕を張り終えたならそれで今晩は寛いでくれ」

眉根に皺を寄せてアンスガルは問い返す。

「は？ 食事と酒、つすか？」

「ああ、長旅で疲れただろう。明日にも出発するから、せめても今日ぐらいはゆっくりして英気を養って欲しい」

アンスガルの側に居た傭兵が、酒と食事があるという場所まで駆けていき、目を見開いて驚き飛び上がる。

「すっげえ！ 本当にありやがる！ おいお前等！ その王子様が酒を用意してくれたってよ！」

隊中から歓声上がる。逆に皆が喜びすぎてイエルケルの方が引く程だ。

アンスガルも強面を崩し笑顔を見せる。

「こいつはありがてえや。早速いたたいちまっても？」

「もちろん、そのつもりで用意したものだ。給仕はいないからそこは自分達でやってくれよ。あと、任務に関して話し合いたいことがあるから、君と主要な人間はその天幕まで来てくれないか」

「了解しやした。てめえ等！ 宿営の準備終えたら酒盛りだ！ 三隊の連中は酒と食事の用意しろ！」

アイリからすれば適當すぎる指示の仕方に見えたが、傭兵達は皆が一斉にてきぱきと動き出し、アイリはいたく感心したものである。

一つだけ既に張ってあった天幕には、イエルケル達三人と傭兵隊長アンスガル、それに彼の副官である二人の傭兵が入っていた。天幕中央にイエルケルが座り、これと相對する形でアンスガルが座る。それぞれの配下は、イエルケルとアンスガルの後ろに控える形で待機。それでも天幕の広さには余裕がある。

「まず、これからの作戦だが、とにかく状況が悪い。敵は三千。味方はお前達傭兵軍の五百のみだ」

他にも命令が曖昧なこと、後続部隊の到着が半月後になりそうなこと、敵は迎撃の態勢をとっており、こちらは一戦するためそこに飛び込まねばならぬこと、等を説明する。アンスガルは表情を変えなかったが、後ろの二人はあからさまに不安そうな顔をしていた。

「とまあ、こんな最悪の状況でな。辺境領の地図や戦場になりそうな土地の詳細な地図を用意しておいたから、何か良い手がないか一緒に考えて欲しい」

人が悪そうに笑うアンスガル。

「なるほど、酒は餌えさですかい」

「餌があるうとなかろうと、私もお前達も最早逃げられんだろう。頑張つて欲しいとは当然思うが、それ以上の下心はないさ」

「はっはは、まったく。しかし弱りましたな、六倍の敵相手にばばつと勝つてばばつと逃げるよ

うな都合の良い手は流石に心当たりがねえ」

二人の間にイエルケルが地図を広げる。

「君が来る前に三つ程検討してみた案がある。いずれも無茶な要求が各所にあるから話半分に聞いて欲しいが、どれか使えるものはないだろうか」

実際三人が考えた案は数十あったのだが、絞りに絞つてこの三つである。

イエルケルの説明に、アンスガルは途中途中で口を挟み更なる説明を請う。そうしてくれとイエルケルが言ったからであるが、途中で話を切られてもイエルケルは嫌な顔一つせず質問に応じていた。なのでついアンスガルも本気で作戦談義を行い、イエルケル達が持つてきた案を修正し、実用可能な所まで持つていつてやる。

その時のアンスガルの話を、イエルケルだけでなく後ろのアイリやステイナも懸命に聞いていてそれが何ともくすぐったく、アンスガルは居心地が良いやら悪いやらと頭をかかす。

『全く、惜しいねえ』



四章

Chapter 4

「おい」

「はい」

執務室にて、アンセルミ王子は側近ヴァリオと対していた。アンセルミは美青年と言っている整った容貌を持つが、ヴァリオもまたこれと並んで見劣りせぬ、貴族然とした風貌であり、二人が並ぶとそこは絵画の中か劇の舞台かと見紛うほどだ。

「おいっ」

「はいっ」

アンセルミの前にはサルナーレ討伐軍の陣容が書かれた書類が。

「この一つだけ明らかに浮いているイェルケル傭兵軍というのは一体何だ」

「此度の戦の名譽ある先鋒を命じられた部隊です」

「あるのは名譽だけだろうが！ 後統部隊とも離れすぎててこいつ等全滅するまで戦ったところで戦況には一切関わってこないぞ！」

「戦場を確かめる目的だそうで」

「そういうのは斥候の仕事だ！ 初陣指揮官の部隊が斥候の真似事したところで上手くいくはずな

からう！」

「彼等に下った命令がまた洒落ていますよ。聞きますか？」

「……言ってみろ」

「カレリア国軍の武威を示してこい、だそうです。傭兵雇って国軍の武威と言われても、イェルケル殿下として困るでしょうに」

「困る所はそこではなからう！ 元帥は全く反省する気はないようだ。どうしたものか」
ヴァリオは落ち着いたままである。

「どの道五百では動きようがないでしょうし、あの王子なら堅く守って本隊が来るのを待つでしょう。宰相閣下に出ることがあるとすればその後になります」

「ほう、案外お前の評価は高いのだな。戦の後、命令違反を咎められたら私が守ろう。流石にこれはやりすぎだ。他の者への示しも含め、一度強く言って聞かせるとしよう」

これでは戦の終わりを待つばかりだ。しかしヴァリオには一つ懸念がある。

彼の耳に入った情報では、イェルケルはバルトサール侯爵達を敵に回しているという。

彼等二人が、敵をそのままにしておくことなど絶対にない。ましてや戦の最中という好機を、彼らが見逃すであろうかと。

イェルケル、ステイナ、アイリの三人は三人共が、騎士の騎士たる所以とまで言われている金属

鎧を使わずに皮の鎧を使っている。金属鎧は重量云々以前に、動きが制限されるのが嫌なのだ。手には槍を、腰には剣を。装備はそれだけ。

三人は揃って部隊の先頭に。道中に戦の気配はなく、長閑な田園風景が延々と続く。ずらずらと並ぶ隊列の先頭にあり騎乗した三人を、農民達が興味深げに眺めている。流石に近寄る度胸はないようだが、それでも幾人かが集まって話し合っているのが見える。

イエルケル達は誰も兜をしていないので、三人の内二人が女であることはすぐにわかる。それが彼等の目には奇異に映るのだらうと、イエルケルは予想してみる。

彼らを見ているとイエルケルは自分の領地の民を思い出す。

「そういえば、ステイナにもアイリにも領地はなかったのか？」

馬にまたがる時、鎧を限界一杯まで短くしないと足が届かないアイリがまず答える。

「内乱以前はありましたな。私も王都ではなくそちらで育ちましたし」

「アイリは領地経営も学んでいそうだな」

「はい。おかげで自分でやるより人にやらせた方が効率が良いということは学べたのですが……戦だけはどうにも。手間をかけて育てた者は、もったいなくて前線に出す気になれません。どうせ育てるのなら事務や監督を覚えさせたいところですね」

「それは意外だ。てっきりアイリは領地経営もまず戦ありきだと思っていたが」

「戦は私が出します。その分他の者は領地をより豊かにすることを考えればよろしいのです」
うーむ、と感心するイエルケル。ふと、話に入ってこないステイナを見てみると、この話題には

入らないぞという気配を漂わせながらあさっての方を向いていた。

「……ステイナは領地経営は苦手か？」

気付かれたか、といった顔をするステイナ。

「べ、別に苦手ではありませんわ。ただ、昔盛大に失敗したもので……」

「一体何しでかしたんだ」

「ちよっと、ほんのちよっとだけ、税金借りてそのお金で家出ただけですわっ」

アイリは堪えきれず笑い出す。

「ほんのちよこつとと来たか！ ぶはははははははは！ 豊作で倍増した増収分を全部持ち出したのであるう！ しかも増収分は王都には関係ないんだから王都への納税は去年と同じ額でいいとか意味のわからんこと言ってるな！ あれはかなり有名な騒ぎであったからなあ」

「ちよっとアイリ！ 余計なこと言わないでよ！」

イエルケルは思わずつつこむ。

「それは失敗とは言わない。ただの犯罪行為だ」

「挙げ句その金で隣国にまで足を伸ばし、国境を治める他所の国の領主を殴り飛ばして逃げて来たんだつたな。もう、ホント、何て言ってもいいかわからぬ程ヒドイ話であったわ」

「ちっ、違いのよっ！ あれは私の身分を知った豚領主が宴に来い来いってぶーぶーうるさいから仕方なく行ったら、あの屑豚私の足触ってきたのよ！ そりゃ殴るでしょ！ そんなもって怒って兵士向けられたら逃げるでしょ！」

イエルケルは笑うに笑えない。

「よくもまあ逃げ切れたものだな。てかそれ外交問題にならんか？」

「そりゃもう私その頃から用心深かったですし！ 馬は常に数頭確保しておきましたし、脱出路もさりげなく確認しときましたから！ あと、外交問題になる前に内乱が起ったのでその辺はうやむやになりましたわ！ 私の横領も一緒に！」

本当にヒドイ話だなあ、と嘆息するイエルケル。ステイナはすぐさま反撃に出た。

「アイリだつてあるじゃない！ ノドヴィック山の盗賊焼き討ち事件！」

今度はアイリが焦る番のようだ。

「なっ！ そ、それは違うぞ！ 誤解だ！ 世間に流れている風説は真相とは著しく異なると前に言ったであろう！」

「なーにが誤解よ。盗賊退治の兵に無理言って混ざった挙げ句、馬鹿正直に攻めることはあるまい、とか言つて盗賊がたまっていた砦、勝手に火付けて燃やしちゃったんでしょ」

「だからあれは勝手にではないと言つたであろう！ 偶々、ほんのちよつと連絡が入れ違いになつただけで。その、まさか焼き討ちは駄目だと言われるとは思わなくてだな……」

「生け捕り目的で盗賊の十倍の兵用意したのに焼き討ちなんてやって良いわけないでしょ！ てか一人で焼き討ち成功させるとかどんだだけ手際良いのよアンタ」

「ここだけの話、最初から焼き討ちするつもりで砦の造り調べて必要な資材も全部用意しておいた。あんな馬鹿みたいな作戦で兵が怪我でもしたら嫌だったしなっ」

イエルケルが総括してやる。

「うん、物事には限度つてものがあるんだ。二人共それをまず学ぶところから始めよう」

むすーつと二人は頬をふくらませる。

ステイナは恨みがましい目で、上目遣いにイエルケルを見上げる。

「殿下はそういうのないますかあ？ ていうかありますよね、ないわけありません。その老成した物腰に至るまで、ぜったい何処かで派手に失敗してるはずだ」

アイリもうんうんと頷く。

「ここは一つ、殿下も白状すべきです。ささつ、遠慮は無用です。我々もまるで欠片も遠慮会釈なく笑うつもり満々ですのってっ」

「そんなフリされてあるなんて言えるか！ 大体私にはお前達の話に並べられるようなやらかした話なんて……」

そこで言葉が一瞬止まる。

「特には、ない、かな」

当然二人は見逃さない。

「でええんかあああああ？ あれあれ？ もしかして殿下隠そうとかしてませんか？」

「良くないですよ！ 実によるしくないっ！ 殿下一人だけ安全域で見下ろそうなぞと、許されざる暴挙ですよっ！」

手をばたばたと振るイエルケル。

「あー、そんなじゃないって。二人のびっくり話に匹敵するような話じゃないんだから、むしろその二つの話の後に出すのが恥ずかしいよな……」
ステイナとアイリは口を揃える。

「じゃあそれで」

「お前等本當こういう時は息ぴったりだよな！」

結局言わされるのである。

「騎士学校に入ってすぐの頃。あまり他の貴族達のことを詳しくない私は、色々と周りの大貴族の子弟達が自慢してるのを真に受けてたんだ。やれ人を斬ったことがあるだの、軍の訓練を受けてただの、従軍経験があるだのとかいうのをな。で、その頃まだ私は他と比べてそんなに劍の腕に差があるなんて思ってもみなかったもんだから……」

ばつが悪そうないエルケル。

「そこまで言うんなら是非試してみたい、とか言ってな、内の一人と一騎打ちしたんだ。うん、まあソイツ一合も打ち合えなかったんだけどさ。それで私な、調子に乗っちゃって、そういう偉そうなこと言う奴片っ端から試してみたんだ。一人ぐらい本當に修羅場を潜り抜けた奴居るだろうと。顔見ればわかりそうなものなんだけどなあ……んで、気がついたら教官達に呼び出されてた」

いエルケルはその時の自分を思い出したのか、本當に辛そうな顔になる。

「教官曰く、貴方は自殺願望でもあるのですか、と来た。皆に袋叩きにされても知りませんぞとね。まさか大貴族の子弟がそんな無法な真似をするはずがない、と思つてたら次の日私は貴族達二十人

に囲まれてた。いっそ、そこで負けておけば良かったんだが……」

あー、と先を読むステイナ。

「全部張り倒しちゃったんだ」

「ああ。囲まれて恐ろしかったのもあるし、卑怯な真似に腹が立ったのもあって、こう、加減をあまりせず……で、だ。結局私への処分はなかった。なかったのは、その、だな、その時の首謀者を……屋敷でうんうん唸つてたんだアイツ。倍に腫れ上がった顔を見られたくなかったみたいで周りに人は居なくて、屋敷の壁をよじ登って、そいつの部屋に乗り込んで、気を失うまでぼっこぼこに殴り続けた」

ドン引いてるアイリに、爆笑しているステイナ。

「結局そいつ学校辞めたんだけどさ、そいつがもう二度と私に関わりたくないと行って学校辞めたせいで、この件生徒側からは誰も追及してこなかったんだよなあ。ダレンス教官にはものつすごい怖い顔で釘刺されたけど」

アイリは頬をひきつらせている。

「殿下、それ王族貴族以前に、まっとうな人間のやっつていいことではありませんぞ」

「わああかかってるって！ 本當、あの時の私はどうかしてたんだ。追い詰められて、とにかく奴を黙らせないとって必死になったらつい……」

延々笑ったままのステイナ。

「あはっ、あはははははっ、殿下、さいっこう。それすつごくいい。王都下町のケンカ自慢が手強い

得するのが先だ。

アンスガルの言葉の矛盾をつこうとするイエルケルの機先を制してアンスガルが言った。

「すんません、流石にこれ以上お二人の前で話したい話じゃありませんわ。あっしもね、好き好んでこんな美人さん方にキツイこと言いたいわけじゃないんで。ここは一つ、お二人は下がらせてもらえませんか。こっちも副官二人は下げますんで、二人で話しましょうや」

「それは出来ない。二人は私にとつて……」

イエルケルの言葉をステイナが遮る。

「いえ殿下。私達は天幕から出ていきましょう」

「しかし……」

「大丈夫です。殿下がどのような判断を下そうと、私達の忠誠は変わりません。それよりも殿下が窮地に陥る方が私達にとつても困りますよ。殿下が我々にとつて最も良いと思う決断を下してくださいませ」

そう言うと、両手をぎゅっと握って震えているアイリの肩を抱きながらステイナは天幕を出て行った。これに続いてアンスガルの副官二人も天幕を出る。

残ったのはイエルケルとアンスガルの二人。

イエルケルは必要以上に強い口調で言う。流石にイエルケルも腹を立てているのだろう。

「金で雇われたとはいえ軍の一員である以上命令違反は重罪だ。それがわからぬお前でもあるまい」

「さて、それはどうでしょうねえ。その罪とやらを裁くのは一体誰なんでしょうか」

イエルケルが驚きに硬直する。

「それです。ね。こっちの要求は実は女騎士二人を外せって話じゃないんですよ王子」

「何？」

「あたしらに働いて欲しきゃ、二人の騎士叙任を取り消せって話でさ」

あまりの衝撃にイエルケルは、危うくその場で崩折れてしまいそうになった。

イエルケルが任務を果たすために、絶対必要な兵を束ねるこの男は、バルトサール侯爵とケネット子爵の息がかかっていたのだ。しかも元帥府からも何やら言い含められている。多少の無茶は元帥府の方で呑むと話しているのだろう。

呼吸十回分。イエルケルは俯き加減に震え続ける。アンスガルはそれを見守っていたが、間を空けた後穏やかに語りかける。

「王子、何もややこしく考えるこたありません。五百の兵と二人の騎士と、どっちが強いかなんぞ考えるまでもねえ。そもそもあの二人ならあつし一人でも充分お釣りが来らあ。この後、命令果たさなきゃなんねえんすよね？ 戦、しなきゃなんねえんすよね？ ならどうすりゃいいかなんてすぐわかるじゃありませんか」

イエルケルは何も答えない。

「二人を切って、んで任務果たして戻ったら頭を下げるべき所には下げる。何、王子程の器量がありゃいくらでも挽回出来まさら。そいつだけはあつしは信じられるんでね。あの作戦案、本当に良

く出来てましたぜ。初陣とはとても思えねえ」

イエルクルの表情には苦悩の皺が刻まれている。アンスガルは慰めるように続けた。

「そりゃ心が痛むでしょう。二人にや恨まれるかもしれないねえ。でもね、大丈夫ですよ。王子がこの場で騎士叙任を取り消すよう二人に言ってくれりゃ、後はあつしらがやりませう。二度と二人が王子の前に顔を出すことありません。確かに二人共大した美人だ、心残りがあるのは仕方ねえ。ですがここは綺麗さっぱり忘れて、次に行きましょうや次に、ね」

搾り出すようにイエルクルはアンスガルに問う。

「何故、この話をお前は受けたんだ？ 気分の良い作戦ではないだろう」

「気分で腹は膨れやせて。それにね、あつし等は慣れてるんですよ。人間誰しも都合の悪いことはありませう。そいつをね、ちょこつとの金で解決してやる。そんな便利屋なんですよ。もちろん王子だって、もし手が必要になったってんなら言ってくれりゃ、どんなクソみてえな話だって金次第で乗りやすぜ」

イエルクルは腹をくくってアンスガルに言った。

「わかった。なら、一つ案があるが聞いてもらえるか？」

「へい、何でしょう？」

「傭兵達の前で、あの二人に盛大に恥をかかせろ。騎士の名を持つにもかかわらず、一騎打ちで傭兵風情に敗れる惨めな姿を私に見せてくれないか」

思わず噴き出すアンスガル。

「はっ、はははははっ！ 王子！ なるほどそいつは名案だ！ それなら二人を首にするに充分な理由だ！ ねえ王子！ あつしは本当に王子が気に入ってるんですよ！ 良かったですよこんなことで貴方が破滅するようになんかなくて！」

イエルクルは、話は終わったと天幕から外に出る。そして小さく呟いた。

「私も、お前のことは気に入っていたよ」

一騎打ちが二つ。対峙するはステイナとアンスガル、そしてアイリと傭兵団一の剣の使い手ジョシュアの二組である。

彼等を取り囲むように傭兵達がおり、皆思わぬ娯楽に歓声を上げている。

何せステイナもアイリも滅多にお目にかかれぬような美人だ。それが徹底的に叩きのめされるといふのだから、タチの悪い趣味を満足させるに充分な催し物であろう。

始める前にイエルクルが注意事項を。

「傭兵達が二人の騎士を侮辱した。二人は騎士である以上、奪われた名誉は剣にて奪い返せ。しかし、お互い戦を控える身。命を取ることはまかりならん。心するよう」

ステイナとアンスガルはまだ、ステイナが長身であることもあり極端に見劣りするようなことはない。とはいえステイナの方が細く小さいのは当然だが。

しかしアイリとジョシュアの組み合わせは最早大人と子供だ。ジョシュアは特に大きな体を持ち、見たこともないような長大な剣を握る。手にした剣まで大人と子供の差がある。

女二人を嘲笑う声がそこかしこから聞こえてくる。ステイナとアイリはイエルケルの意図を正確に把握しており、この処遇に、心から感謝していた。

「始め！」

だからこの合図と同時に、二人は勇躍それぞれの敵に襲い掛かっていく。

まず、ステイナ対アンスガルだ。

最初の一撃を、アンスガルは受けきれず剣を弾き飛ばされる。

呆気にとられる観衆、そしてアンスガル当人。当然の顔をしているのはステイナのみで、自分で弾いた剣を拾ってアンスガルに向かって投げつけてやる。

「次、二本目」

そう言うと神速の踏み込みから斬り下ろす。アンスガルではなく剣を狙ったものと察したアンスガルは剣を引く。が、何故か間に合わない。

ありえぬ加速によりアンスガルの剣は再び叩き落される。ステイナはそこで手を止めず、アンスガルを蹴り飛ばして後ろに下がらせる。

弾いた剣は地面に当たって大きく跳ねる。これを自分の剣先で器用にひっ掛け、くるりと回しながら剣を投げる。投げた剣は綺麗にアンスガルの手に収まった。

「三本目。負けを認める気になったら言うてちょうだい。それでも許さないけれど」

アイリ対ジョシユアはもっとヒドイことになっている。

ジョシユアが振るった大剣を、アイリは真正面から斬り返して堂々と受け弾くのだ。

大人が振るった棍棒が、子供の振るう枯れ木の枝に弾き飛ばされている。そんな風景だ。

剣の強度と重量を考えれば、ジョシユアの大剣をアイリの剣が受けることなぞ出来るはずがないのだ。にもかかわらず、アイリはむしろ大剣に打ち掛かるようにしながら折れず、ジョシユアの大剣の方が押され弾き出される。

ジョシユアは既に小娘を相手にしているとは思っていない。目の前の不可思議な現象に抗うべく必死になって全力を叩き込むが、アイリは涼しい顔で全ての剣撃を弾き言った。

「これが一番の使い手だと？ ただの力自慢ではないか。ロクに技も知らぬでは仕方があるまい。ほれ、力比べをしてやるから打ち込んでこい」

片手に持った剣をまっすぐ立て、半身になった姿勢で構えるアイリ。

雄叫びと共にジョシユアが勢いをつけ全体重を乗せながら切り掛かる。ほんの一瞬、衝突の瞬間剣を引くことでジョシユアの威力全てを受け、止める。そこからは鏝迫り合いだ。

低い位置のアイリに、上からのし掛かるようにして大剣を押し込むジョシユア。

しかし、片腕のみでこれを支えるアイリはびくりとも動かない。

「ふむ、力は、まああるか。体重の乗せ方も悪くない。所作が隙だらけなのは……もう仕方がないな、言っただろうなるものでもあるまい。そこは諦めるとしよう。では、そろそろ動くぞ、覚悟はよいな」

あくまで片手のままで、アイリは剣をじわりと押し上げる。

アイリの剣より、ジョシユアの大剣の動きの方がわかりやすい。押し込まれるにつれ、その先端

がより大きく浮き上がっていく。そのまま更にアイリの剣は進み、遂に大剣は垂直に。そこで止まらず、大剣を体の前に構えた姿勢のままジョシユアは後ろに倒れていき、膝を折ってもまだ許されず、完全に仰向けに倒れてもまだ剣は止まらず、受けに使っていた大剣がジョシユアの首元に押し付けられていく。

「ま、待てっ！」

「命は取るなどの仰せだ。心配するな」

そんなことを言いながらも、アイリは剣を止めることはない。既に苦しさのあまりジョシユアは言葉も出せない。アイリは首だけを後ろに向け、イエルケルに問う。

「殿下、首とは切れば死ぬのでしたか？」

「ああ、そこを切れば流石に死ぬな」

「なるほど、でしたら腕の一本でも……」

「その時は出血で死ぬだろう」

「おお、確かにそうですな。さて、では何処を斬ったものか」

この会話の間も、まるで剣から力は抜けず。

この頃にはステイナの方も三十本目に入っており、アンスガルは剣を強打され続けたせいで、もうまともに剣も握れぬ程手が痺れてしまっている。彼も長く剣に生きた男だ。それがいくら信じられぬといっても、彼我の圧倒的な技量差は理解出来る。卑怯者の誇りを覚悟で無茶をして勝負を引っくり返そうとしたのだが問題にもならない。そもそもこうして対峙した時点でどうにもしよ

うがなくなる相手であった。

打って剣を落としてはすぐ投げ渡し、アンスガルが受け取りを認めようと拒否しようと、打ちかかってくる。剣を持たぬまま打ち込まれた時は、剣の平でぶっ叩かれた。剣の平で振ったというのに、アンスガルにはその剣筋すら見えなかった。

傭兵達は出来の悪い見世物を見せられているようであった。彼等がクズながらもその力に敬意を払い従ってきた強者二人が、女二人に完膚なきまで叩きのめされているのだ。

呆然としたまま黙り込み、ただ剣が打ち鳴らされる音のみが響く。

アンスガルもジョシユアも、遂に身動きが取れぬ程困憊し切り地に伏す。

それぞれの敵手を見下ろすアイリとステイナ。イエルケルは厳かに宣言する。

「女だからと騎士を見くびり侮辱した罪は重い。斬れ」

アンスガル達を一騎打ちで殺さない理由は、圧倒的な実力差を傭兵達に教えてやるためで、その役目もう終わった。

ほぼ気絶していたジョシユアは無抵抗のままに首を刎ねられる。

うつ伏せに倒れていたアンスガルは、首を持ち上げ恨みがましくイエルケルを見上げ、その姿勢のままステイナに首を斬られた。

イエルケルは残った傭兵達に告げる。

「この部隊の主は私、イエルケル王子であり、私の副官は二人の騎士アイリとステイナである。文句のある者は早々に申し出よ。我が騎士のいずれかが相手をしよう」

傭兵達から異論は出ず、そのまま決闘騒ぎは解散となった。

その夜。イエルケルはアイリとステイナを伴って密かに天幕を抜け出し、宿営場所から少し離れた小高い丘の上に居た。こうしたのは寝込みを襲われるのを恐れたという理由もあるがそれ以上に、傭兵達がどう動くのかをよく見える場所で確認しようと思ったのだ。

「……やはり、無理だったか」

落胆するイエルケルにステイナは慰めるように言う。

「殿下はあの状況で出来る限りのことをしましたわ。結果こうなったのは時の運でしょう」

宿営場所から傭兵達が次々に逃げ出していくのが見える。アイリはずっと憤慨したままだ。

「あれだけ偉そうなことを抜かしておきながら、いざこうなると一目散に逃げるだど？ 殿下、今すぐお命じ下さい。あやつら一人残らず斬り殺してくれましょう」

イエルケルに代わってステイナがこれを宥める。

「無駄なことしないの。アレ全部斬ったところで、何一つ状況は変わりはないんだから」

イエルケルはアンsgアルと部隊一の猛者を斬ることで、残る傭兵達を掌握しようとしたのだ。どの道指揮官であるアンsgアルが生きていては、どれだけ脅そうと戦場での傭兵軍が全く信用出来なくなる。イエルケルの苛烈な処断と騎士二人の圧倒的な力で傭兵達をねじ伏せ従わせようとしたのだが、彼等は皆逃亡の道を選んだようだ。

或いはアンsgアルの言っていた女騎士に従うなど冗談ではない、という兵達の話には真実の部分もあったのかもしれない。三千を五百で相手取るといった無理を通すのに、アンsgアルではなくイエルケル達では心もとないと思ったという線も充分にありうる。

アイリは諦めきれずイエルケルに言い纏る。

「まだ間に合います。連中の前に行き、戻るよう命じれば……」

「たった三人で五百人を見張ることなど出来はしないよ。いざ突撃、という時に逃げ出されるぐらいなら、今そうされた方がまだマシだ」

ステイナは手にしていた地図を見下ろす。この一枚を見れば作戦の全てがわかるよう細部に渡って書き込んだものだ。敵の動きの予想からこちらの対応まで様々な場合に合わせて動き方を変化させられるよう書き記されていた。

出陣までの間、三人で必死になって考えた作戦の全てがこの一枚に込められている。

これをステイナは二つに折った後、おもむろに半分に千切る。千切れた二枚を重ね、更に千切る。幾重にもそうして小さく細くなるまで千切り、風に乗せ流した。

イエルケルもアイリもステイナを止めない。こんな紙切れもう必要ないと二人にもわかっているのだ。

考えることも、やるべきこともたくさんあるのだろうが、三人は今は何もする気になれない。ただ逃げ出していく傭兵達を、見送るのみであった。

傭兵達は物資に手を付けるような度胸はなく、イエルケル達三人は山と残った食料で妙に豪勢な朝食を取る。そして食事が終わるとイエルケルは誰に言うともなくぼやいた。

「さて、本当に、どうしたものかなあ」

ステイナは大きく伸びをしながら。

「暗殺でもしますか？ 出来ることってもうそれぐらいしかないですよ。成功するかどうかは別として」

アイリは真顔で作戦案を提示する。

「私とステイナならば全速力で走ればそうは追いつかれませんが、それが山道ならなお良しです。なので攻撃しては逃げるを繰り返すというのほっ」

イエルケルは思わず含み笑う。

「この期に及んで、聞けば答え返してくれるもんなあ二人共。大したもんだよ」

それが冗談と受け取られぬよう、イエルケルは硬い表情を作る。

「なあステイナ、アイリ。私はね、どんなに侮辱されようとも、どんな冷遇を受けようとも、我慢は出来たんだ。だって何を言われようと私は自分が強いことを知っているからね。私を蔑む誰よりも私は強いと私自身が知っているし、いざという時になれば誰よりも私が有用だと証明する自信があったんだ」

自嘲気味に笑うイエルケル。

「それだけが私の拠って立つ全てだったんだよ。だから軍務を命令されて、出来ませんでしたなん

て言うことだけは絶対に許せない。それだけは、断じて認められないんだ」

嫌な想像をしているようで、イエルケルは目尻を上げ眉根を寄せる。

「戦の場で役に立てぬのなら、その後ろ指さされるぐらいだったら、死んだ方がマシだ」

比喩表現でも誇張表現でもない、そのままの意味の言葉だ。

重苦しい最後の言葉に、イエルケルの決意が込められている。

アイリが勢い込んで何かを言おうとして、ステイナの腕に制される。ステイナもまた睨むように険しい表情でイエルケルに言った。

「殿下。もし私達を、真に殿下の騎士であると認め下さるのなら。命じて下さい、共に死ねと」

ステイナの目は本気であり、アイリもまた同じ意見であると表情が言っている。

それでもなお、イエルケルは躊躇する。大切な部下を、ようやく見つけた信じられる友を、自分の我侭で死なせて良いものかと。

ステイナはそんなイエルケルの迷いがわかるのか、更に言葉を重ねる。

「騎士は主君のために死ぬものです。もしそう出来たのなら、他の誰が認めず納得しなくても、私達だけは、満足し納得し喜んで死んでいけるでしょう。いずれ死ぬ身の騎士ならば、せめても死に方ぐらいは良いものを選びたいのですよ」

この迷いは完全に晴れることはないだろう。それでもイエルケルはステイナとアイリの説得は無理だと思えし、何よりイエルケル自身が、一緒に死ぬならコイツ等が良いと思えてしまったのだ。「わかった。一緒に死んでくれるか、ステイナ、アイリ」

「もちろん。地獄の底にだって付き合いますよ」

「よくぞ言って下さった！ これでもう恐れるものは何もありませんね！」

「……………そうか。よろしく、頼むぞ」

この瞬間、イエルケル、ステイナ、アイリの三人で、三千の兵に突っ込むことが決定した。イエルケルは二人の顔を見る。

アイリは無邪気に嬉しそうな顔をしている。幼さの残る愛らしい顔立ち、響く横笛のような澄んだ声、言葉や表情だけでは飽き足らず小柄な体を目一杯使ってする感情表現の数々、一日中眺めていても飽きないだろう。ずっとアイリを見ていると、娘を溺愛する父親の気持ちが良くわかる。あまりに可愛らしすぎて目の中に入れても痛くないとはこのことかと。愛くるしさの塊のような娘だが、勇気と武勇は唸るほどその身に詰め込んでいる。

ステイナは穏やかに微笑む。大人びた表情をすることの多いステイナだが、いつも何処かに幼さを感じさせる。無理に心を大人に育てたため、顔つきが追いついてくれないのではないかとイエルケルは思っている。ステイナの女性主張著しい胸は確かに大きいものだが、彼女の全体像から大きくバランスを崩すようなものではない。お尻の曲線やら腰のくびれ、首元の前も後ろも、全身各所の部位が女の子をこれでもかと魅せに来るが、高身長のパンと伸びた背筋を中心に、絶妙のバランスを保って破綻することがない。

美貌と世の女性全てが羨む体型を手に行っているステイナは、しかし必要とあらば敵を葬るに躊躇せぬ戦士の残酷さも持ち合わせている。それでも、心許した相手に見せてくれる油断しきった笑顔

は、何よりも眩しいものに見える。そんな彼女の剣は神速の名が相応しかろう。傲慢で不遜な態度を押し通すに足る、圧倒的実力者である。

イエルケルは我が身の幸福を噛み締める。あまり良いことのない人生だったが、最後の最後にこんなにも素晴らしい友を与えてくれたのだから、イエルケルとしては帳尻は合ったと思ってしまう。ただ、少しの照れくささはある。あと、イエルケルも男の子であり、二人が美人すぎるのも照れに拍車を掛けている。

なので、二人から視線を逸らしながら別の話を振ってみる。

「なあ、三人で何人やれると思う？」

下らない話。それも、この三人でならきつと楽しいだろう。すぐに二人も乗ってきたのは、もしかしたら彼女達も照れていたのかもしれない。

「そもそも敵前衛に届きませんか。殿下は？」

「向こうもまさか三人で来るとは思わないだろう。そんな不意を突いて前衛に辿り着き、そうだね、五十ってところか」

「あら、前衛に届いたんなら百は欲しいですわよ」

「そうは言うがなあ、アイリはどうだ？」

「え？ あ、いや、そ、そそそそうですな、おおむね二人と同じぐらいですかなっ」

歯切れの悪い返事に、イエルケルとステイナがじっとアイリを見つめる。

「っだー！ わかりましたってば！ 正直に言わせてもらえば、私は五割ぐらいで勝てるんじゃない

ないかなどか思っております」

ステイナがアイリの脇をつつきながら。

「一人頭千よ千。どうやったって無理じゃないの」

「ええい、やめんかつ。全滅するまで三対三千の戦いが続くわけがなからう。三分の一も殺せば恐れおのき逃げ出すだろ」

イエルケルも流石に呆れ顔を隠せず。

「それでも一人三百以上だぞ。というかだ、八方から一気に押し込みにかかられたら防ぎようがないだろ」

これにはステイナが反論する。

「三人居るんですからその辺は何とかなるでしょ。問題があるとすれば殿下ですわねえ」

「お前等と同じ水準を要求するなっ！ そもそも体力がもたん」

アイリが平然と答える。

「日が暮れるまで戦えれば、後は一度引くなり何なり好きに出来るでしょう。殿下がそこまでつかどうかが鍵ですなあ」

「……お前達は大丈夫なのか？」

「私でしたら、丸二日山を駆け回ったこともあります。戦がどれほど疲れるのかはやってみなければわかりませんから、具体的に何時まで大丈夫とは言えぬのですが」

「……ステイナもか？」

「ええ、アイリに出来ることは大抵私にも出来ます。出来ないのは背を縮めることぐらいね」

「すうううていいいなあああ！ 言っではならんことを言いおったなああああ！」

気にしてたのか、と驚くイエルケルを他所に、二人の間で掴み合いが発生する。

「ま、私が倒れた時は、二人は構わず突っ込んでくれ。せつかくの晴れ舞台だ、妙な気遣いは無用だぞ」

ステイナとアイリはじゃれあいをびたりと止め、同時に言った。

「絶対に嫌です」

まずはアイリが。

「この期に及んで何をおっしゃるか！ 殿下が死んだらそこで私も死ぬので、敵首魁を打倒したくばせめて敵本陣中央までは生き残って下さい！」

次にステイナが。

「見てくれる人が居るから頑張れるんじゃないですか。殿下が死んだら私は速攻諦めて、さっさとあの世に追いかけて行きますよ」

肩をすくめるイエルケル。

「その時は盛大に恨み言言われるんだろなあ。今から憂鬱だよ」

さて、じゃあそろそろ行くか、と三人は三人分だけの食料を馬に乗せ、出立する。

去り際に、アイリが宿営地を振り返って見ていた。

彼女の視線の先は大量の糧食が置かれている天幕。その周囲には傭兵達が運びやすいようにと、

彼女が元帥府相手に大暴れして用意させた多数の荷馬車が並んでいる。この荷馬車一つ一つを造りがしっかりしているかどうか確かめて回ったのもアイリだ。

アイリがこれを見送りながらどんな表情をしているのかは、結局彼女が振り向いた時には何時ものアイリであったので、イェルケルにもわからぬままであった。

騎乗していても、林の中に居ると案外からは見えないらしい。小高い丘になっている場所からイェルケル、ステイナ、アイリの三人は、丘を下った先にある平野に、広く展開している辺境領軍三千を見下ろしていた。イェルケルは正直な感想を述べた。

「人、多すぎじゃないか？ あれ実は三万人とか居るんじゃないか？」

アイリが真面目くさって言う。

「殿下とて敵数の数え方は習ったでしょうに……とはいえ、想像していたより遙かに、迫力がありますなあ」

ステイナはほっそ目になっている。

「やつぱ帰らない？ うん、言ってみただけです。でもあれは勝てないわ、流石に」

この位置からだ、大体人の大きさが蟻と同じぐらいの大きさに見える。ただ、蟻の巣を引っくり返したところであの数は出て来ないだろう。しかもあの蟻共は整然と並び武器を備え、号令一つでまるで一体の生き物のように自在に動き回るのだ。

そして一つの群として見た時のあの巨大さと溢れんばかりの圧力はどうか。この世に比肩すべき生物を見つけれられない。敢えて言うならば自然現象か。雪山の雪崩、氾濫する川、大雨に崩れる山肌、家をも巻き上げる竜巻、いずれも迫り来れば人の身に回避する術はない。そんな巨大さ。

それらが天の意思によらず人の恣意によって動きうる恐怖。鱗のように所々で陽光を照らし返す金属の輝きは、或いは鎧であったり槍であったりとこの群体の頑強さを示している。

彼等が進めば村は潰れ、町は裂かれ、林は倒され、森は貫かれよう。単体ではそれが如何に巨大な獣であろうと止め得るとは思えぬ。数は暴力であり、数こそが力であった。

人一人の猪口才な小細工など意に介さぬ。軍とはこうあってこそ初めて軍となる。軍に対するには軍を以てする他なく、だからこそ人の争い事の最後には軍が頼られるのだ。

アレに見える全てが、他者を害する、滅ぼす、打倒するために備えるべきを備えた兵士だ。ただの一人も、虫を潰すように簡単に殺されることなどありえない。種類も豊富で、槍に騎馬に弓にと各種取り揃えてあり、何処に出しても恥ずかしくない『軍』の威容であった。

イェルケルは目を細めて敵陣を眺める。イェルケル達先遣隊の情報でも得ているのか、迎え撃つべく陣を構えており、兵士達も号令待ちの状態だ。

開戦を前にした緊張感はいずれも共有しているようで、軍全体から高揚したような、何処か落ちて着きがないような動きが見られる。一人一人を見るとその動きはより顕著だ。

腰に差した剣を何度も抜いたり差したり繰り返す男。興奮した様子で隣の者と話をしている男。自分の鎧を叩いてその硬さを確かめる男。槍の石突で地面をつつく男。

若い者ばかりではない、むしろイエルケルより年は上の者ばかり。そんな彼等すら落ち着いてられない場所、戦場に居るのだと実感させてくれる。

震えが来る。

イエルケルはその武を振るう前、決まって体が震えてくる。出自も何も関係ない。ただ強い者が勝つ。数を集めようと、武器を揃えようと、勇気を奮おうと、より自分が強ければ勝てる。勝てばより自分が強いと証明出来る。

その紛れのなさにイエルケルは惹かれたのだ。武は、ただ己のみの世界である。

苦しい思いを何度も何度も何度も繰り返し、積み上げに積み上げてきた力を、発揮し披露する舞台を前に高揚せぬ方がおかしいだろう。

深呼吸を一つ。

敵も味方も準備は終わっている。ならば後は往くのみだ。

イエルケルは何も言わず馬を進める。ステイナもアイリもこれに続いた。

林を抜けて少し経つが、まだ敵側から発見された様子はない。こんな堂々とした斥候を想定していないのかも、と思うと少し愉快な気分になれるイエルケルだ。

そんな密かなイエルケルの楽しみもすぐに終わり、敵陣に動きが出始める。しかし、彼等は軍を動かすようなことはせず、軍中を伝令が忙しく行き来しているのが見える。

アイリは不思議そうな顔だ。

「気付いたようだが、迎撃には動かぬな」

ステイナは伝令の動きを目を細めて見つめる。

「使者か何かと思ってるんじゃない？ ただ、それだけじゃない、かな？ ああ、多分アレ私達が

辺境領域で暴れた当人達だつてバレてるわ」

他人事のようにイエルケル。

「騎士を三十人も斬ってるし、警戒されてしかるべきだろうなあ二人共」

「それは光栄ですが、ならばもう少し迎撃態勢を整えるなりしてもらわぬと、何やら不意打ちをするようで気分が落ち着きませんな」

「……あー、もうそうよね。ここまで来たらいっそ名乗り上げて真正面から突っ込みましょうか。

ね、殿下。何かかっこいい台詞でアイツ等怒鳴りつけて下さいよ」

「今、ヒドイ無茶振りを見た」

「おおっ！ 確かにそれは我等が主、殿下こそ適任ですな！ 後世に残るような名演説を期待しておりますぞ！」

「……お前等の連携って、ほんつといらん時に発揮されるよなあ」

暢気なやりとりをしている間にも敵陣は近づいてくる。

丘も半ばまで降りる頃になると、三千の陣は一目で全てを見きれなくなる。首を右に向け、左に向けてようやく端と端を確認出来る。その間にはずっと人垣が続いている。

流石に前列に配置されるだけあって、人垣は皆大した面構えである。イエルケルとて剣には覚えがある身。あのどれと剣を交えることになっても後れを取るつもりはない。だが、あれ全部とやれ

と言われれば尻込みぐらいするだろう。

つい少し前の武者震いは何処へ行ったものか、イエルケルは本気で恐ろしくなってきた。

何をどう考えてもあれらを打ち破る術が思いつかない。打ち破るところか、ここから逃げ出したところで逃げ切れる気さえしない。

正面に並ぶ陣容に対し、手にした槍の何と心細いことか。薄皮のような鎧も、一筋の藁にしか見えぬ馬も、何より戦を一度も経験していないイエルケル自身が最も頼りないだろう。

足の先から頭のとっぺんまでが恐怖に凍える。体内を流れる血流全てが凍りついたような。それでも動く、敵へと進む体が恨めしくて仕方がない。

救いを求めるように左を見る。ステイナは、平然と馬を進めている。

いや、違う。そう信じイエルケルはステイナをよく観察すると、その証を見つけた。

ステイナの手綱を握る手が震えているのが見えたのだ。またその表情も硬く、きっとステイナも恐ろしいのだろうとイエルケルは思うことにした。

そのステイナは、じつとイエルケルの方を見ている。いや、視界にイエルケルが入っているだろうが、彼女は一切イエルケルに注意を払っていない。

彼女の視線の先へ、イエルケルも目を向けた。

二人の視線を受けたアイリは、二人と比べて馬の首一つ分前へ出てしまっていることにも気付かぬまま、実に嬉しそうに敵陣を眺めているではないか。イエルケルは声を掛け、どうしてそんな顔をしていられるのか聞こうとした。しかし、どうやっても声が出ない。

自分の臆病さに呆れたのか、臆病さを彼女に見られるのが嫌なのか、イエルケル自身にもその理由はわからない。が、声は他所から出てくれた。

「ねえ、アイリ。貴女随分余裕よね。怖くないの？」

ステイナの声は、いつもと変わらないように聞こえた。

「ん？ 何を今更。それよりもだ、見てみるステイナ。奴等槍備えをしておるがまるで殺気が漂って来ぬ。恐らくは我等を使者と見て、脅しにかかったのである。まったく、無駄なことをするものよのう」

イエルケルは我が目を疑った。アイリの様子は、まるで祭りを前にした子供のようではないか。楽しんで楽しんで仕方がないと敵陣を眺めている様子は、数多ある露店のどれで食事を取るかに迷っている様そのものだ。驚くよりも呆気に取られたイエルケルは、背後から笑い声が聞こえて来ることに驚き振り返る。

「あっ、あつはははははは。ホント、アイリってもう、アンタさあ、前から思ってたけど怖いものつてないでしょ」

「貴様自覚はないのか。貴様の説教がこの世で一番恐ろしいわ。もうな、生まれたことすら後悔する程落ち込むのだぞ。貴様は一度他人の気持ちというものを考えるべきであろう」

その返事に止まらない程爆笑しだすステイナに、慥然としているアイリ。そして、色々と馬鹿らしくなってきたイエルケルだ。

「なあステイナ。アイリって、本当凄いやというか、凄まじいやというか、ちょっと変やというか、何か

